

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 6

中原遺跡

(付編)

1999年3月

国 地 方 建 設 局
文 育 委 員 会

志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 6

中原遺跡

(付編)

1999年3月

建設省中国地方建設局
島根県教育委員会

目 次

第1部 志々地区の製鉄関連遺跡

1. 獅子尻鉛跡	3
2. 獅子古鉛跡	3
3. 梅ヶ迫谷鉛跡	4
4. 市場鉛跡	4
5. 仁井屋鉛跡	5
6. 竹谷鉛跡	5
7. 竹谷奥鉛跡	6
8. 尺後谷1号鉛跡	6
9. 尺後谷2号鉛跡	7
10. 柿の下鍛冶跡	7
11. 月根坂鉛跡	8
12. 鉄藏鉛跡	8
13. 獅子鉄藏奥鉛跡	9
14. 森行鍛冶屋鉛跡	9
15. 落合精錬所跡	10
16. 慶雲寺鉛跡	10
17. 鈴原鉛跡	11
18. 大立神鉛跡	11
19. 段原鍛冶跡	12
20. 土居ノ上鉛跡	12
21. 中原遺跡	13
22. 坂根鍛冶跡	13
23. 才谷鉛跡	14
24. 大覚坂鉛跡	14
25. 小屋敷鉛跡	15
26. 大歳鉛跡	15
27. 二代木鉛跡	16
28. 人楨鉛跡	16
29. 丸山鉛跡	17
30. 貝谷鉛跡	17
31. 徳原鉛跡	18
32. 板屋I遺跡	18
33. 板屋II遺跡	19
34. 板屋奥鉛跡	19
35. 口谷尻鉛跡	20
36. 弓谷鉛跡	20
37. 弓谷奥鉛跡	21
38. 門遺跡	21
39. 神原II遺跡	22
40. 神原鉛跡	22
41. 伊比谷1号鉛跡	23
42. 伊比谷2号鉛跡	23
43. 伊比谷3号鉛跡	24
44. 向原鉛跡	24
45. 獅子谷遺跡	25
46. 横現上鉛跡	25
47. 下山遺跡	26
48. 戸井谷尻遺跡	26
49. 戸井谷遺跡	27
50. 長老畠遺跡	27
51. 殿淵山毛宅前鉛跡	28
52. 殿淵カナクソ畠鉛跡	28

第2部 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

1. NAK-1	31
2. NAK-2	32
3. NAK-3	33
4. NAK-4	34
5. NAK-5	35
6. NAK-6	36
7. NAK-7	37
8. NAK-8	38
9. NAK-9	39
10. NAK-10	40

11. NAK-11	41	22. NAK-22	52
12. NAK-12	42	23. NAK-23	53
13. NAK-13	43	24. NAK-24	54
14. NAK-14	44	25. NAK-25	55
15. NAK-15	45	26. NAK-26	56
16. NAK-16	46	27. NAK-27	57
17. NAK-17	47	28. NAK-28	58
18. NAK-18	48	29. NAK-29	59
19. NAK-19	49	30. NAK-30	60
20. NAK-20	50	31. NAK-31	61
21. NAK-21	51	32. NAK-32	62

第3部 付 論

- 付論 1 中原遺跡出土木材の樹種同定 パリノ・サーヴェイ株式会社 63
 付論 2 中原遺跡から検出された近世のウシ骨について 井上貴央 67
 付論 3 飯南地域の近世鉋とその經營者について 今田昭二 71
 　　—頼原町周辺地域を中心にして—
 付論 4 中原遺跡大鍛冶場跡出土炭化物の¹⁴C年代測定 総九州環境管理協会 81
 付論 5 中原遺跡大鍛冶場跡の地磁気年代 時枝克安・成 亨美 83
 付論 6 中原遺跡出土大鍛冶場関連遺物の金属学的調査 大澤正己 89

第1部 志々地区の製鉄関連遺跡

ここに掲載する調査票は、昭和63年度に頓原町教育委員会が国費及び県費の補助を受けて行った志々地区埋蔵文化財分布調査で作成されたものに、島根県教育委員会が実施している志津見ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の成果を加えたものである。

頓原町教育委員会が行った分布調査の成果は既に『頓原町の遺跡－志々地区－』(1989年)として公刊されているが、調査票は基礎資料として使われ掲載されていない。しかし、その内容は各時代の製鉄遺跡、鍛冶遺跡の特徴が分かるようよく整理されており、中原遺跡を含めた志々地区的製鉄関連遺跡を理解する上で重要な資料であることから、頓原町教育委員会の許可を得て、ここに掲載することとした。

昭和63年度の調査にあられた方々は、田中迪亮氏（当時佐田町文化財調査委員 現頓原町教育委員会調査員）、今田昭二氏（当時頓原町文化財調査委員 現頓原町教育委員会町史編纂室）、春日智明氏（当時頓原町文化財調査委員）、五明田福一氏（当時頓原町文化財調査委員）、岩田広敏氏（当時頓原町文化財調査委員）、原 全輝氏（当時頓原町文化財調査委員）である。

困難な条件の中で作成された貴重な調査票の公表を快諾された頓原町教育委員会、ならびに田中迪亮・今田昭二両氏に感謝申し上げます。

凡　　例

1. 番号は、図1 志々地区製鉄関連遺跡分布図の番号と一致している。
2. 遺跡の名称は、原則として頓原町教育委員会で作成された調査票に記載されている名称をそのまま用いている。しかし、島根県教育委員会の発掘調査により遺跡の状態が判明し、変更が必要になったものは、発掘調査で使われた名称で記載している。また、分布調査時と発掘調査時で遺跡自体の名称が変わっているものがいくつかあるが、調査票には分布調査時の名称で記載し、発掘調査時の名称を備考欄に記している。
3. 遺跡の推定年代は、分布調査時に立地等から推定されたものを原則として記載しているが、発掘調査の結果や筆者の判断で変更したものもある。図2 志々地区製鉄関連遺跡時期別分布図はこの推定年代を基に作成したものである。
4. 遺構・山上遺物については分布調査時のものを原則として記載しているが、発掘調査や筆者の再踏査によって変更したものもある。
5. 遺跡の位置は国土地理院発行の25000分の1「三瓶山東部」「野呂」を用いたもので、地域全体を示した志々地区製鉄関連遺跡分布図は50000分の1「三瓶山」を使用している。
6. 遺跡写真・遺跡略図については、分布調査時のものを原則とし掲載しているが、発掘調査が行われたものについては調査後のものを使用している。

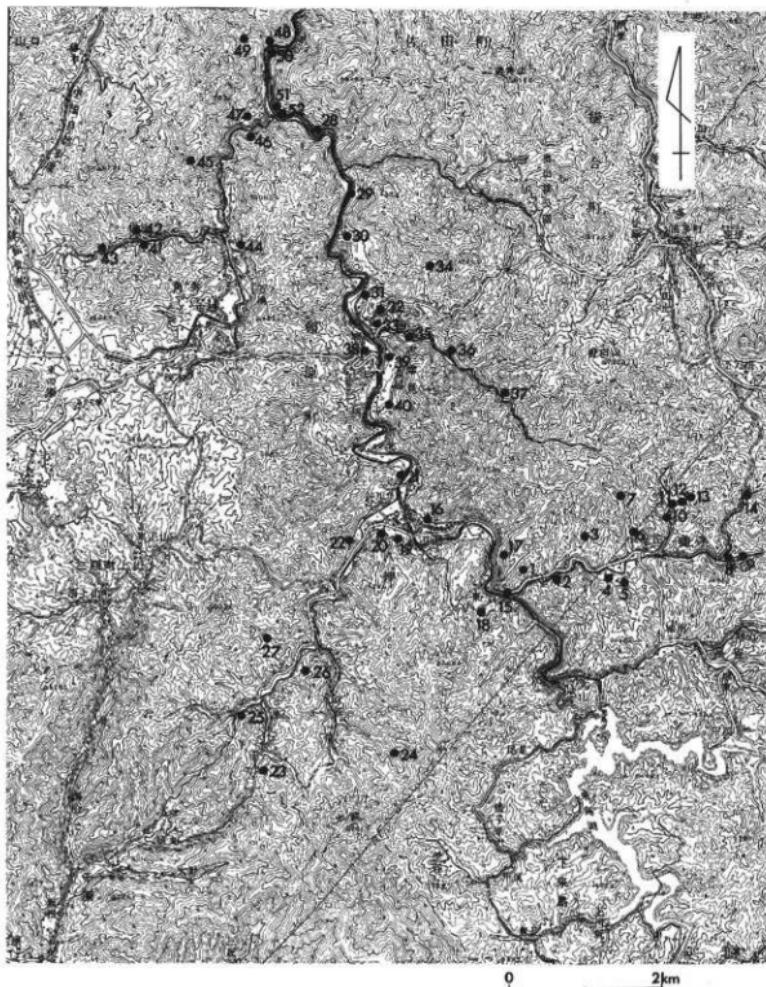
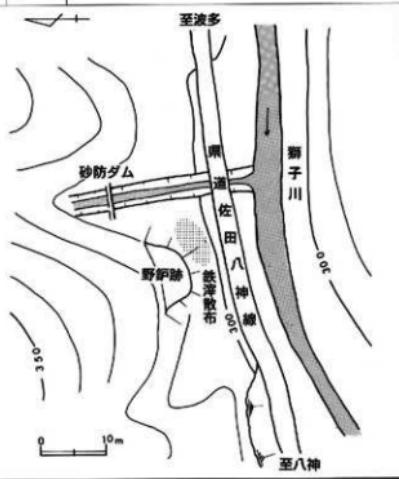
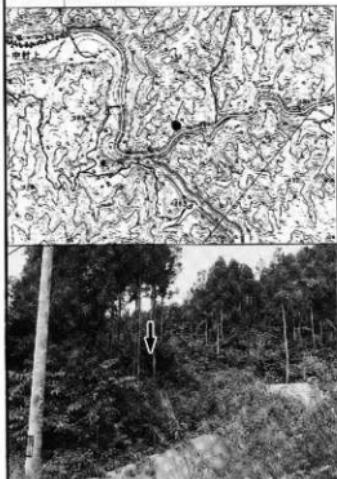
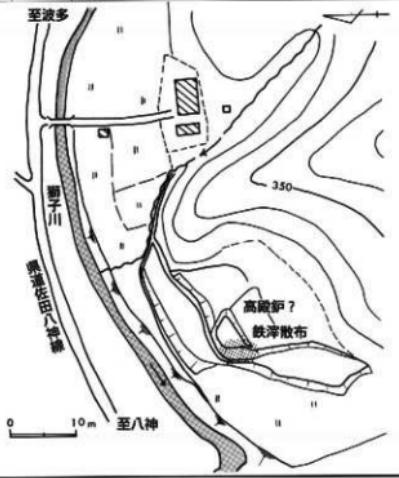
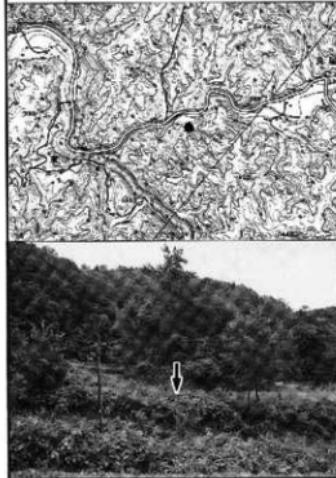


図1 志々地区製鉄関連遺跡分布図

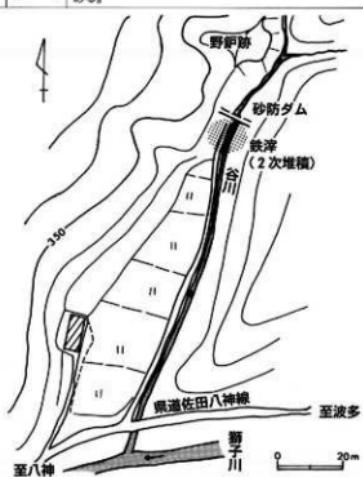
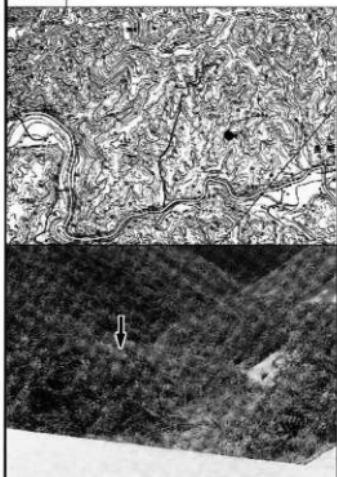
番号	1	遺跡名	獅子尻跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字獅子349-5
立地	丘陵斜面			推定年代	中世
遺構			丘陵斜面に長さ10m程の平坦面が設けられ、その下側斜面に鉄滓・炉壁片、焼土が見られる。平坦面の規模から野耕と推定される。		
出土遺物	鉄滓・炉壁片			備考	



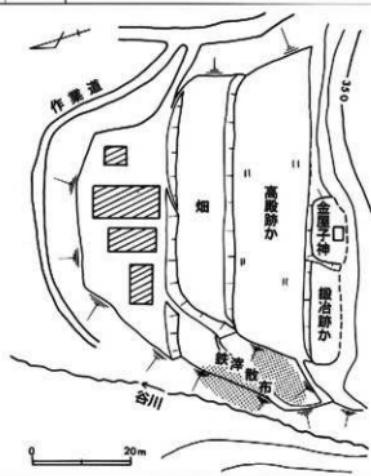
番号	2	遺跡名	獅子古跡跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字獅子577-2
立地	丘陵端部平坦面			推定年代	近世
遺構			丘陵端部に平坦面が設けられ、鉄滓が多量に散布している。高殿跡跡と推定される高まりもある。鉄滓捨て場周辺は耕地となっているが、山内として諸施設があった可能性がある。金屋子神社は約100m東側に祭られているが、授業時期等の伝承はない。		
出土遺物	鉄滓・炉壁片			備考	鉄滓の多くは近代に落合精錬所に搬出されたという伝承がある。

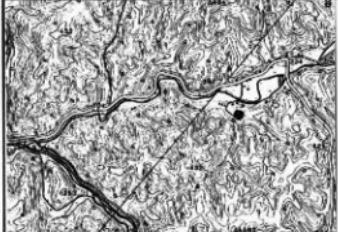
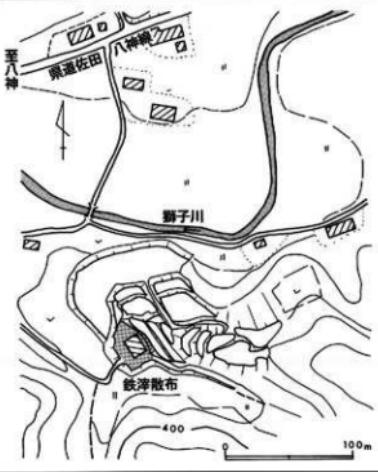


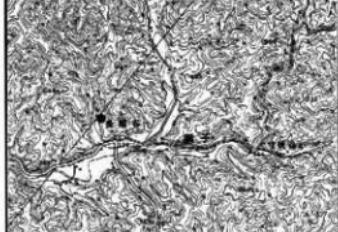
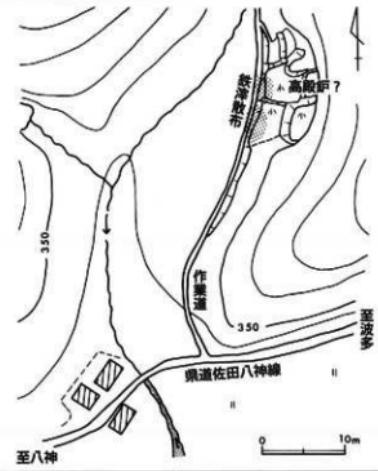
番号	3	遺跡名	梅ヶ迫谷跡跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字獣子340-1
立地				推定年代	中世
遺構			谷川に突出した台地上に平坦面があり、谷の下流域河岸から鉄滓が検出されている。平坦面は小規模であることから野野跡と推定され、付近には他に平坦面は見られない。砂防ダム建設によって川床が掘削され、その底土中からも大小の鉄滓が確認されている。		
出土遺物	鉄滓	備考	鉄滓の多くは近代に落合精錬所に搬出されたという伝承がある。		



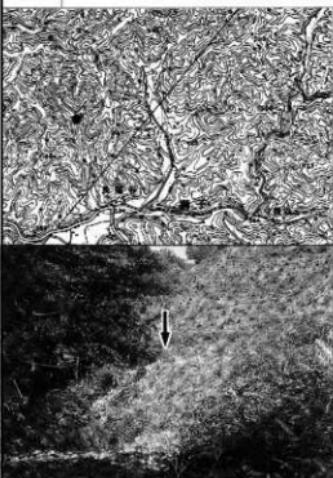
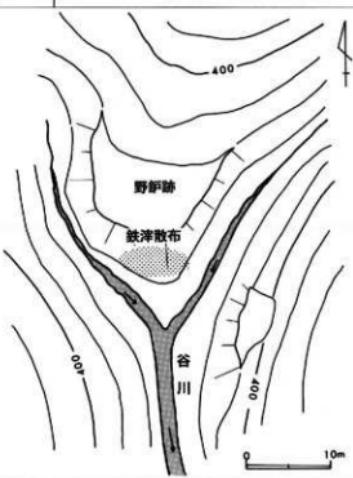
番号	4	遺跡名	市塙跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字獣子301
立地				推定年代	近世
遺構			2アール余りの広い平坦面の西側斜面に鉄滓が散在し、高麗軒があったと考えられる。その南側上段の平坦地には金屋子神の祠跡と見られる礎石や、鎌治洋が散布し、一連の山内施設があったものと推定される。		
出土遺物	鉄滓・炉壁・鎌治洋	備考			



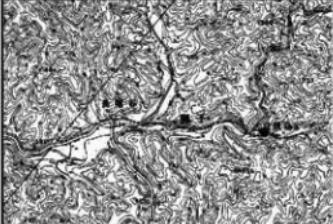
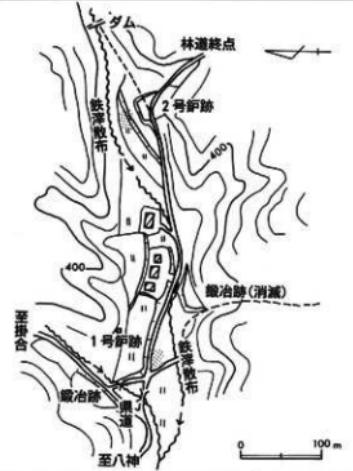
番号	5	遺跡名	仁井鋸跡	所在地	島根県飯石郡飯原町大字獅子289
立地	丘陵裾部の台地上	推定年代	不明		
遺構	宅地は鉄津治場の上に建設されており、製鉄造塊は東側上段の烟と推定される。また、煙東側の露頭で焼結した床面が確認でき製鐵窯連造構の一部と見られる。				
出土遺物	鉄津				
	 				
					

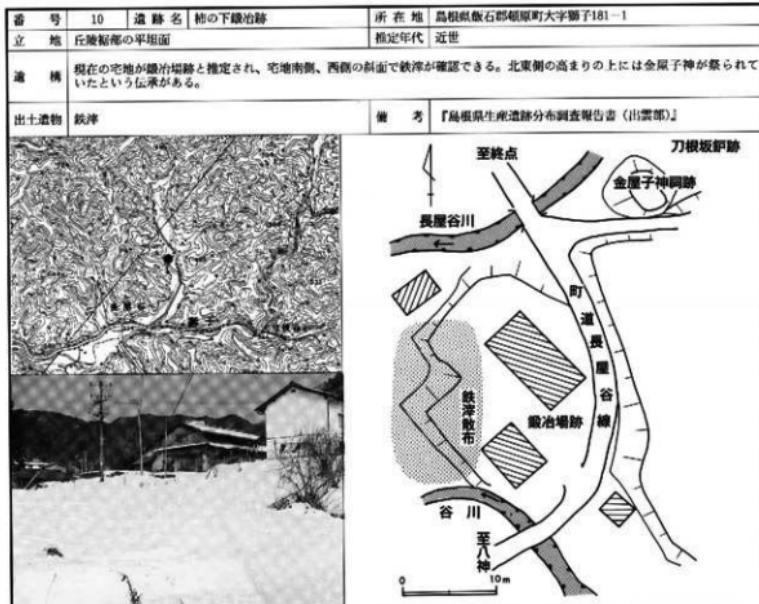
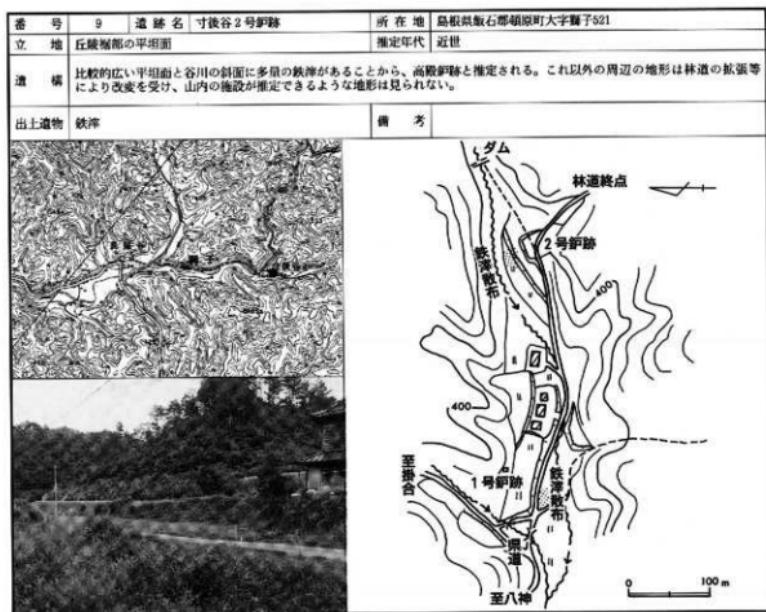
番号	6	遺跡名	竹谷鋸跡	所在地	島根県飯石郡飯原町大字獅子220
立地	丘陵裾部の平坦面	推定年代	近世		
遺構	丘陵裾部の緩斜面を造成した複数平坦面があり、西側の斜面に多量の鉄津が見られる。高殿鋸跡と推定される広い平坦面の周囲に山内の施設が置かれたと見られる平坦地が続く。				
出土遺物	鉄津				
	 				
					

番号	7	遺跡名	竹谷奥鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字獣子388-1
立地	丘陵裾部の平坦面			推定年代	中世
遺構	丘陵裾部に僅かに突出する平坦面があり、鉄跡は南側斜面に堆積。谷川下流域でも多く確認できる。鉄跡と推定できる平坦面が小規模であることや、周囲に平坦面が見られないことから、野炉と推定される。				
出土遺物	鉄滓	備考			

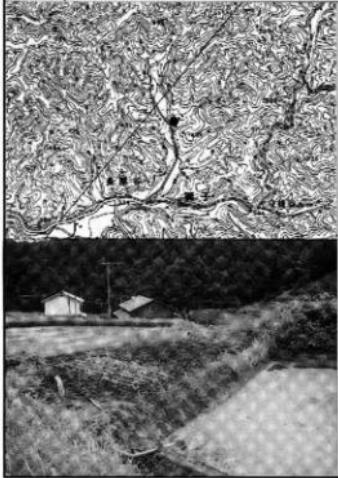
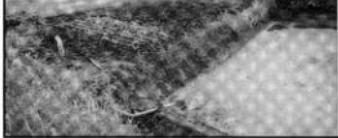
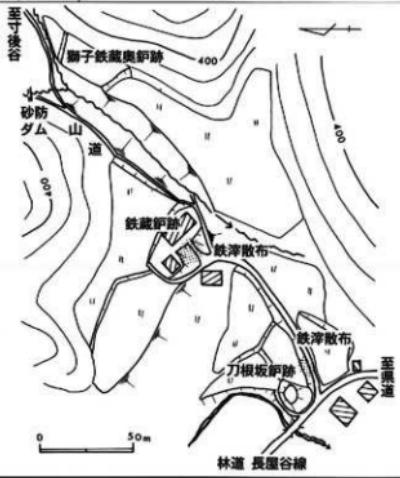



番号	8	遺跡名	寸後谷1号鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字獣子22-1
立地	丘陵裾部の平坦面			推定年代	近世
遺構	高殿鉄跡と推定される平坦面と周囲にいくつかる平坦面がある。鉄滓は谷川周辺で確認されているが、鉄滓堆積場は近年の道路改良工事により削り取られている。高殿鉄跡と推定される平坦面の背後には金屋子神祠跡がある他、西側と南側の平坦面には鍛冶場があったと推定される。				
出土遺物	鉄滓・鍛冶滓	備考	南側の鍛冶場は道路工事で消滅か。		

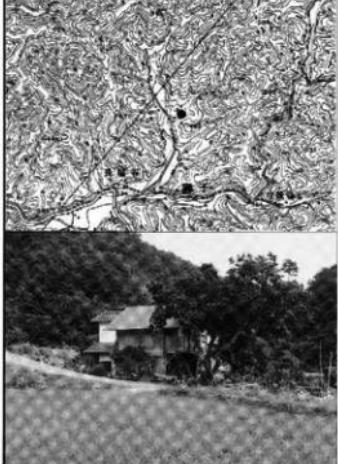



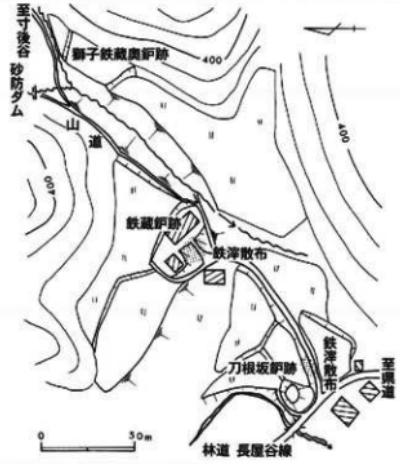


番号	11	遺跡名	刀根坂鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯原町大字獅子138-1
立地	沖縄地に突出した丘陵先端部			推定年代	近世
遺構					
出土遺物	鉄滓	備考	獅子鉄藏奥鉄跡、鐵藏鉄跡、柿の下鍛冶跡と隣接した位置にあるが、採集についての伝承はない。		

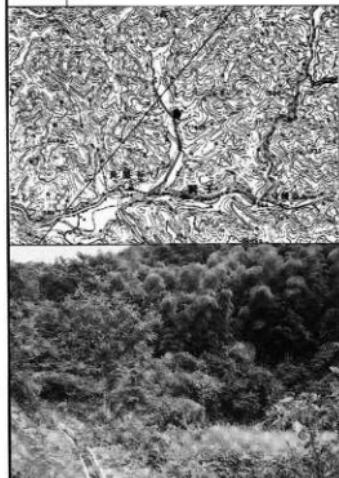
番号	12	遺跡名	鐵藏鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯原町大字獅子137
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	近世
遺構					
出土遺物	鉄滓・鉄礫片	備考	現在の宅地が高殿鉄跡と推定され、その周辺や下側の斜面で鉄滓、鉄礫などが確認される。宅地西側の水田周囲では小形の鉄滓、焼土、炭等が検出されることから隣接した位置に鍛冶場がおかれたものと推定される。		





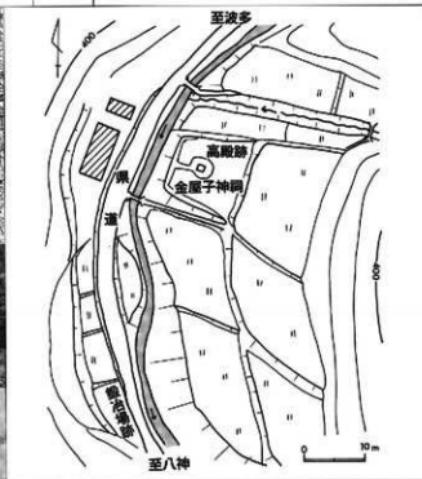
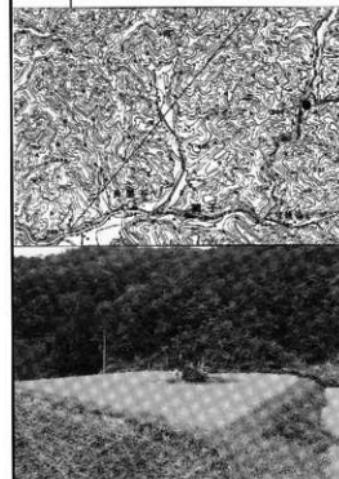
番号	13	遺跡名	獅子鉄砲奥跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字獅子469
立地	丘陵部の平坦面			推定年代	近世
遺構	高殿跡と推定される平坦面の後、南側の平坦地一帯は山内の施設が置かれていたと推定される。付近では多量の鉄滓と鉄壁片が確認されている。				

出土遺物 鉄滓・鉄壁片 備考

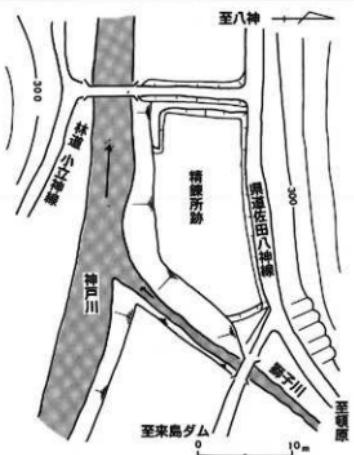
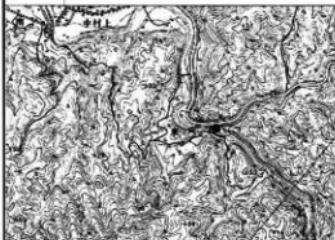


番号	14	遺跡名	森行銀治屋跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字獅子10-3
立地	丘陵標高の平坦面			推定年代	近世
遺構	金屋子神社の位置は高殿跡の本床付近と推定され、床面は赤褐色で接着して固くなっている。近世軒の山内がそのまま保存されている状況で、現在の宅地が元小畠跡、下流西側の堤には銀治塀が確認されていることから、銀治場跡と推定される。				

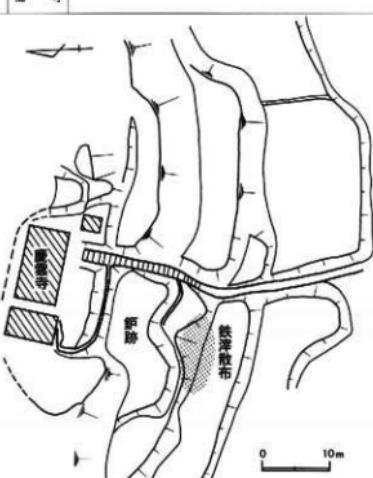
出土遺物 鉄滓 備考



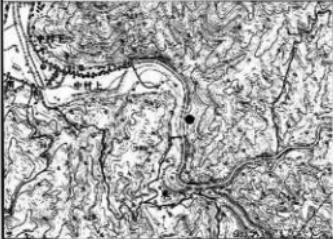
番号	15	遺跡名	落合精錬所跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字落合649-1
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	近代（第1次世界大戦頃）
遺構	斜面に大量に残る鉄滓を再精錬する高炉があったと伝えられ、赤煉瓦の破片が確認できる。各地の鉱脉から搬出された鉄滓が近くの集積場に集められていたと伝えられる。				
出土遺物	鉄滓・煉瓦	備考			

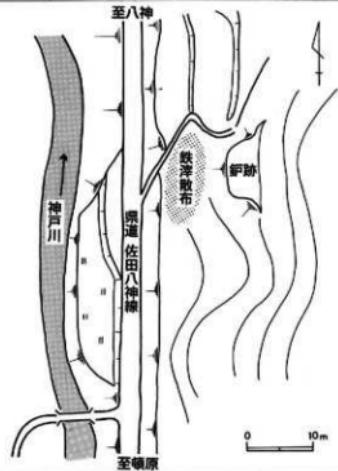


番号	16	遺跡名	慶雲寺鉄滓	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神108
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	中世
遺構	丘陵斜面に削平された数段の平坦面が見られるが、その上方の平坦面の斜面に鉄滓が散布している。平坦面の規模は、15m×8m程度で、野耕と推定される。				
出土遺物	鉄滓	備考			

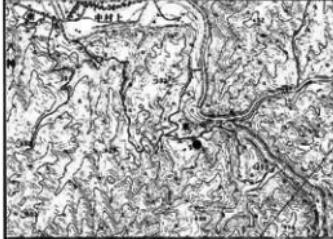


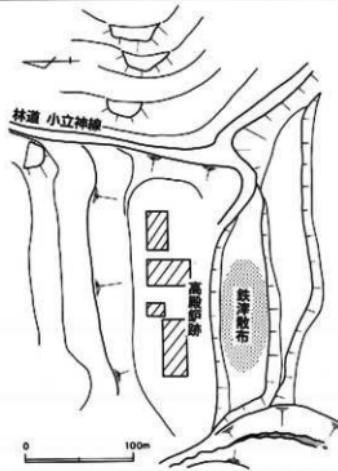
番号	17	遺跡名	鉢原跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神1636-2
立地	丘陵斜面の平坦面	推定年代	中世		
遺構	丘陵斜面を削平した10m程の平坦面が見られ、その下側斜面に鉢跡が散布している。平坦面の規模から野耕と推定される。				
出土遺物	鉄滓				
		備考			



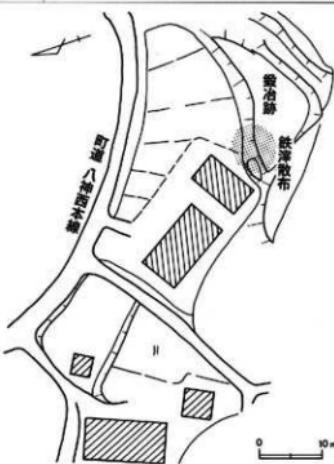
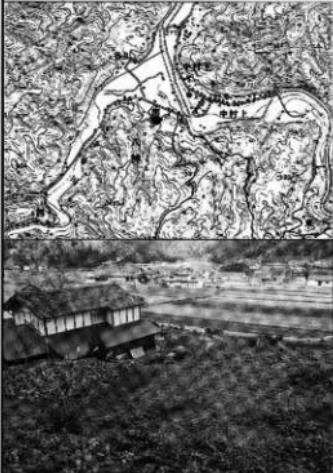


番号	18	遺跡名	大立神跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神880
立地	丘陵斜面の平坦面	推定年代	近世		
遺構	現在の宅地に高殿跡があったと推定される。平坦面の大きさから見て山根櫓程度のものと思われ、宅地南側の斜面と鉢跡が確認できる。鉢跡の西側の山の斜面には2～3段の加工段があり、自然石が点在することから墓地と推定される。				
出土遺物	鉄滓				
		備考			

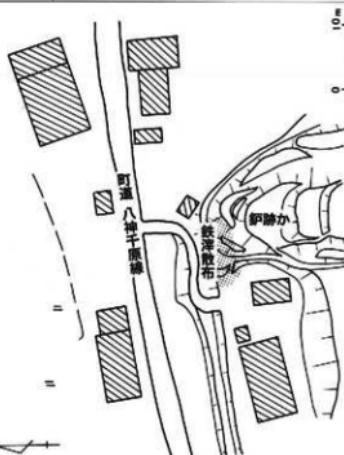
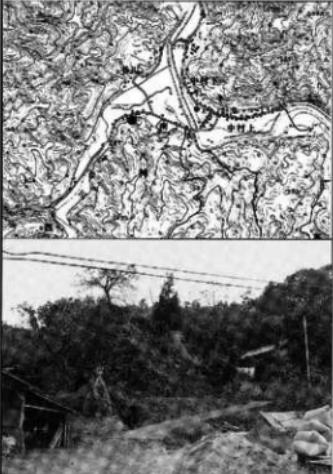




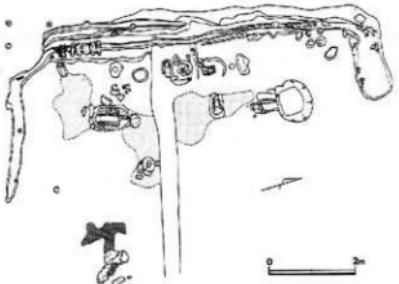
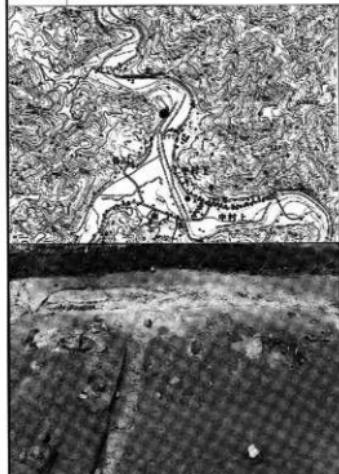
番号	19	遺跡名	段原鍛冶跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神623-2
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	不明
遺構					
出土遺物	鍛冶跡・鍛型跡		備考		



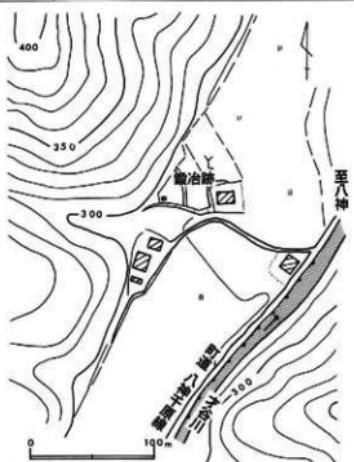
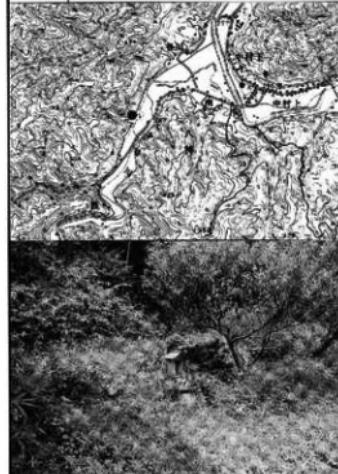
番号	20	遺跡名	土居ノ上鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神1817
立地	丘陵先端部の平坦面			推定年代	不明
遺構					
出土遺物	鉄跡・羽口		備考		



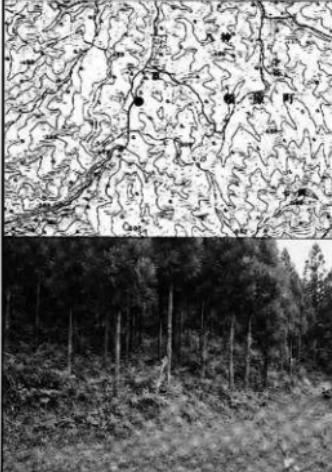
番号	21	遺跡名	中原遺跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神1560-2ほか
立地	丘陵裾部の平坦面			推定年代	近世末
遺構	大型冶場跡	1棟が検出されている。建物跡は桁行12m・梁行5mほどのもので、周間に釘溝蓋板や柱軸等の木材も遺存していた。炉は左下端。木場に相当する2基の組合せで計4基が検出されており、3時期にわたって炉を作り替えたり、補修しながら操業していたことが判明している。			
出土遺物	模型鍛冶炉・鍛冶・粗鉄瓶・羽口・陶磁器		備考	1990年、島根県教育委員会発掘調査。本報告書掲載。	



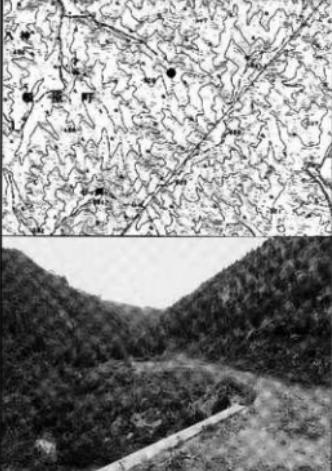
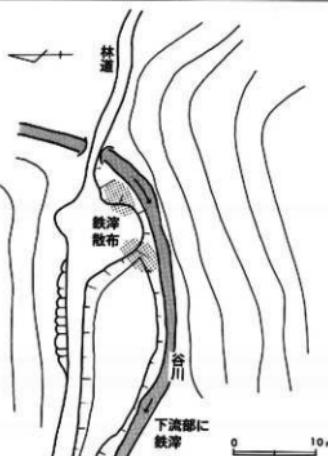
番号	22	遺跡名	板根鐵冶跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神421-2
立地	丘陵裾部の平坦面			推定年代	近世
遺構	周囲を削られているが、6m×8m程の平坦面があり、周囲に小形の鉄津が散布する。平坦面には金属子神の祠があり、鉄製鳥居、埴塙が置かれている。				
出土遺物	鍛冶・鉄製鳥居・埴塙羽口		備考		



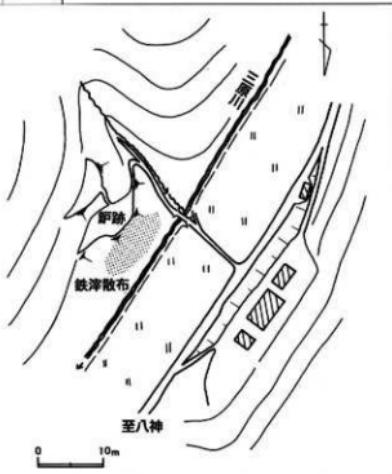
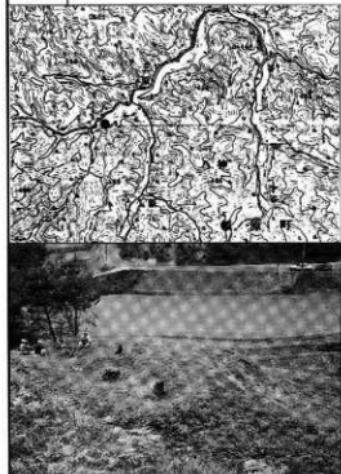
番号	23	遺跡名	才谷鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神1893-6
立地	丘陵裾部の平坦面			推定年代	近世末期～近代初期
遺構	丘陵裾部の緩斜面を段状に削平した平坦面がいくつも見られる。平坦面の端部には石垣が築かれ、高殿炉を中心に戻治場、金屋子神社などの山内施設があり、周辺には大形の炭窯も点在している。近世末期の山内がほぼ完全に保存されていると考えられる。				
出土遺物	鉄滓	備考	赤来町来島永田家の経営と伝えられる鉄山である。鉄滓は第1次世界大戦頃、再精錬のため搬出されたという。		



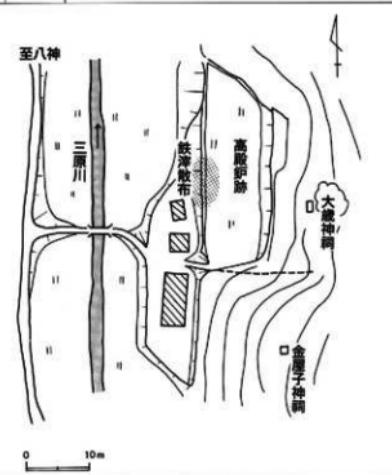
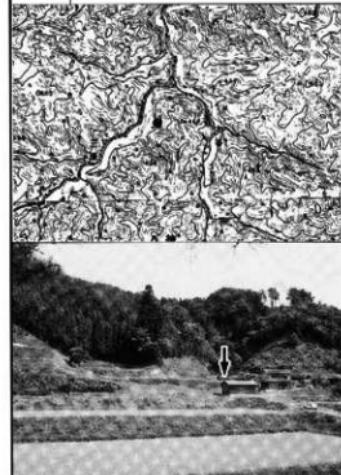

番号	24	遺跡名	大覺坂鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神1895-1
立地	谷川に突出する舌状台地			推定年代	中世
遺構	現状は埋められた林道の転向場となっているが、平坦面下の斜面や谷川で鉄滓が確認できる。周囲の地形や平坦面の規模から見ると、野割と思われる。				
出土遺物	鉄滓	備考			

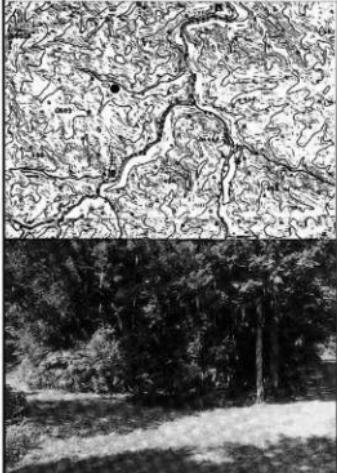
番号	25	遺跡名	小屋敷鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神1179
立地	丘陵斜面平坦面			推定年代	中世
遺構	現状では墓地となっているが幅10m程の平坦面があり、その下の斜面で鉄跡が確認できる。平坦面の規模から見て野郭と思われる。				
出土遺物	鉄津	備考			



番号	26	遺跡名	大歳鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字八神1241
立地	丘陵裾部平坦面			推定年代	近世
遺構	現状では水田となっているが広い平坦面があり、高殿郭があったと推定される。園場整備のため一部削り取られ、鉄滓捨て場は埋まっている。宅地の後でも鉄津が確認できるが、施土等も含まれている。裏の丘陵に大歳神祠と金屋子神祠がある。				
出土遺物	鉄津	備考			

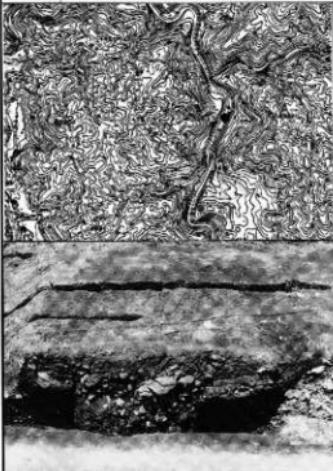
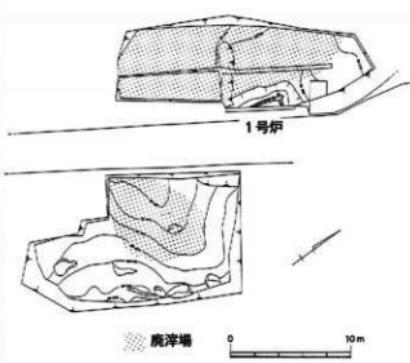


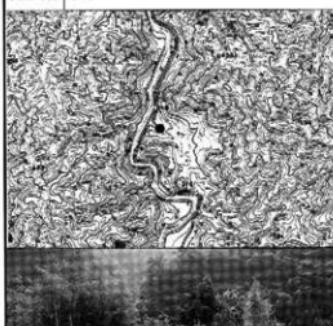
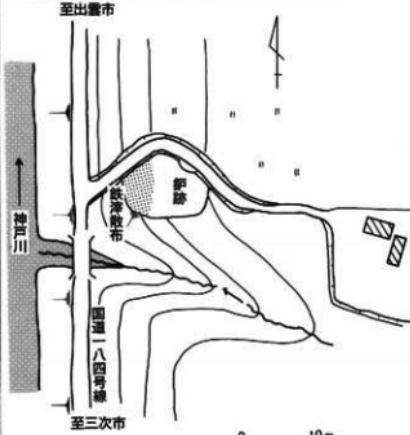
番号	27	遺跡名	三代木鉢跡	所 在 地	島根県飯石郡飯原町大字八神2137
立地	丘陵裾部平坦面			推定年代	近世
遺構	高殿鉢が置かれたと推定される平坦面と、その背後に金屋子神鉢跡がある。平坦面の先端部は削り取られ、断面に焼結した粘土面が見える。鉢洋は再利用のため搬出されているが、若干確認できる。				
出土遺物	鉢洋	備考	周辺の小字に「虎町」というかんな流しに関わる地名がある。		

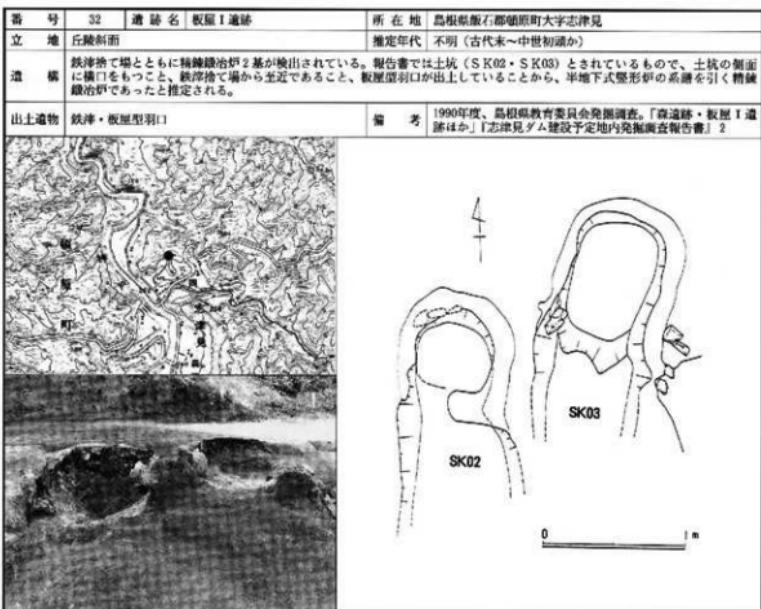
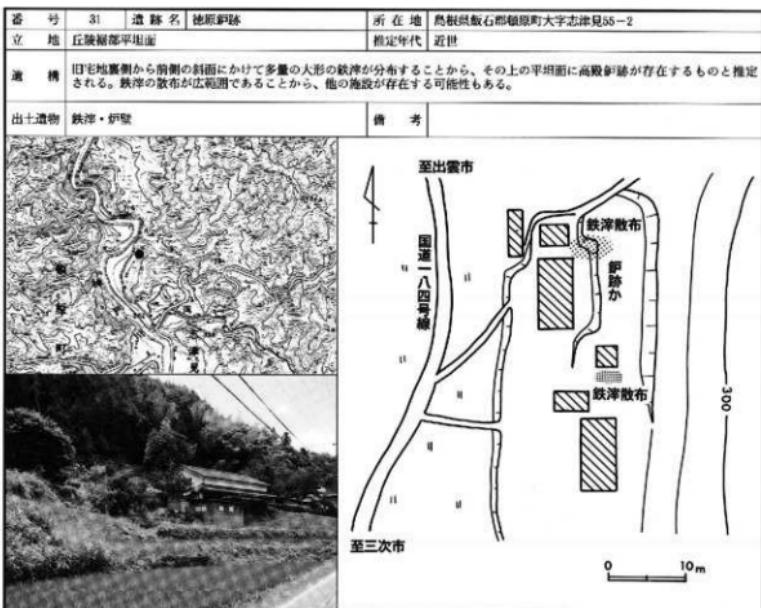


番号	28	遺跡名	大核鉢跡	所 在 地	島根県飯石郡飯原町大字志津見15-2
立地	丘陵裾部平坦面			推定年代	近世
遺構	平坦面の寺戸川寄りの位置に2基の関鉢跡が認められ、周囲より鐵冶炉5基、鐵池状壠塁、掘立柱建物跡5棟以上などが検出されている。1号炉は大規模な高殿鉢の地下構造と見られるもので、本体・小舟のはか竈小舟をもつのが特徴である。2号炉は1号炉に先立って営まれたもので、規模が一同小さく、床跡も比較的簡素である。				
出土遺物	鉢洋・鉢片・寛永通宝・キセル・刀子・錆金具・陶器	備考	1996年度、島根県教育委員会発掘調査。田部家文書に文政1年間に操業したとの記録が残っている。		

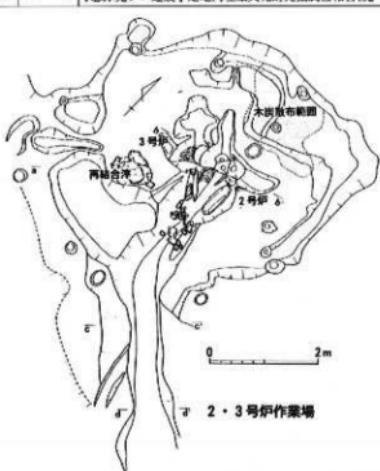
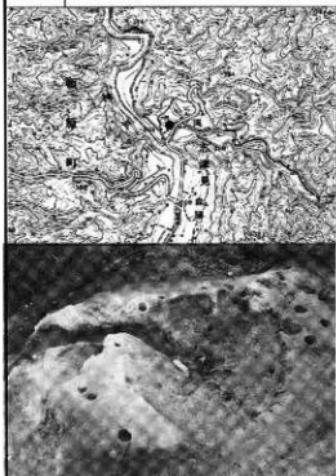


番号	29	遺跡名	丸山鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字志津見593-3		
立地	丘陵斜面平坦面	推定年代	近世				
遺構	国道184号線により大きく削り取られており、高殿鉄の床釣りの一部が残存していたが、本床・小舟など主要部は失われていた。神戸川側の斜面には多量の鉄滓が捨てられており、製鉄炉はその排滓場の一部を切って營まれていたことから、先行する製鉄炉があったことが想定できる。						
出土遺物	鉄滓・炉壁片・金はさみ・陶磁器・寛永通宝						
		備考	1996年度鳥根県教育委員会発掘調査。旧称「丸山2号鉄跡」、「丸山1号鉄跡」地点は鉄滓のみで遺構は確認されなかった。				
			 				

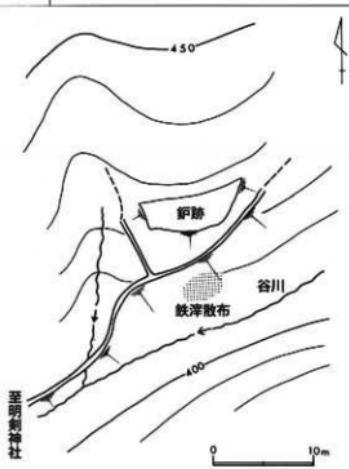
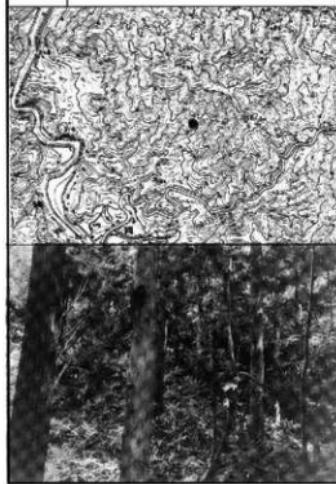
番号	30	遺跡名	貝谷鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字志津見28		
立地	丘陵斜面	推定年代	中世				
遺構	道路上に削られた断面に赤く焼結した小規模な団みがある。これが製鉄炉地下構造に相当するなら、野炉があるものと推定される。						
出土遺物	鉄滓・炉壁片						
		備考	 				



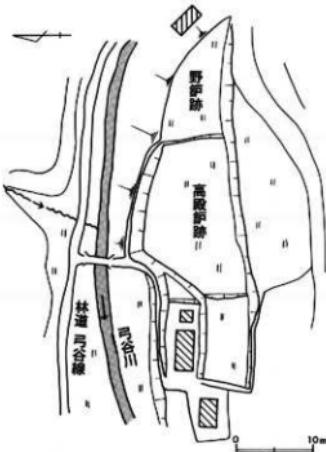
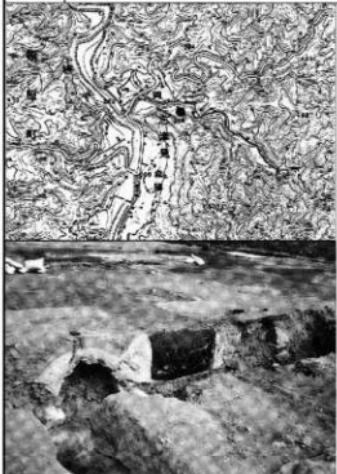
番号	33	遺跡名	板屋三遺跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字志津見772ほか
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	古代末～中世
遺構	丘陵斜面を削平した平坦面で、製鉄炉が2基、精錬鍛冶炉が2基が確認されている。製鉄炉は1号炉が本体のみもつ小形のもの、4号炉は本体の両側に小舟状の窓を備えたやや大形の壇下構造をもっている。精錬鍛冶炉は3号炉→2号炉の順に宮まれ、炉の形態は半地下式壇型炉の系譜を引くものである。窓口は外径が大きく独特の板屋型羽口である。				
出土遺物	炉壁片・鉄滓・鐵塊・板屋型羽口・粒状滓・鐵造剝片	備考	1994・95年度、島根県教育委員会発掘調査。「板屋三遺跡」「志津見ダム建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書」5		



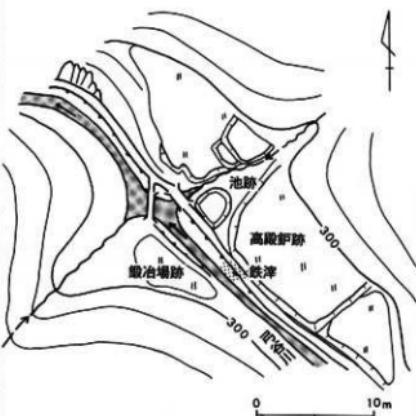
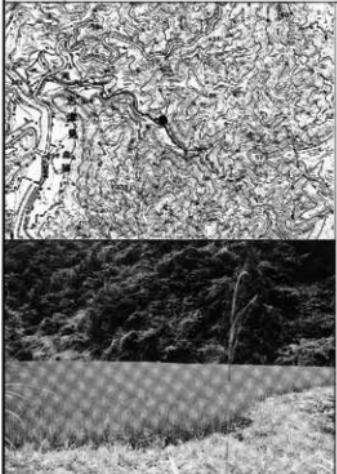
番号	34	遺跡名	板屋奥鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字志津見643
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	中世
遺構	谷の分岐点に突出する尾根先端に営まれたものである。10m程の規模な平坦面が造られ、その下側斜面で鉄滓が確認できる。周囲には他に平坦面が認められないことや、その規模から野鉄跡と推定される。				
出土遺物	鉄滓	備考	付近は通称「鉄床」と呼ばれている。		



番号	35	遺跡名	弓谷尻跡	所在地	島根県飯石郡頃原町大字志津見791
立地	丘陵裾部の平坦面			推定年代	中世・近世
遺構	中央に高殿跡と推定される平坦面、西側に中世の野籠と江戸時代の獨立柱建物跡が認められている。現在調査中であるが、中世の遺構は長さ4mほどの本床に礎土を入れられ、両側に小舟状の溝をもつ。高殿跡は詳細は不明だが、付近で羽口も検出されており、大鎌冶場などの施設がある可能性もある。				
出土遺物	鉄滓・炉壁・羽口	備考	小字名は「鉢原」である。1998年、頃原町教育委員会発掘調査の「弓谷跡」と同一遺跡。		



番号	36	遺跡名	弓谷跡	所在地	島根県飯石郡頃原町大字志津見685
立地	丘陵裾部の平坦面			推定年代	近世
遺構	高殿跡と推定される平坦面をはじめ、元小屋跡、元屋子神祠跡、鍛冶職場跡とみられるいくつかの平坦面が周囲にある。鉄滓は弓谷川沿いで確認できるが、少量である。				
出土遺物	鉄滓	備考	田畠文書に見られる跡跡で、天保年間から明治期にかけて断続的に操業されたことが分かっている。		



番号	37	遺跡名	弓谷奥鉛跡	所在地	島根県飯石郡朝日町大字志津見682
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	近世
遺構	小規模ながら高殿鉛跡と推定される平坦面があり、その下側斜面に鉄滓が散布している。周囲には関連施設が置かれたと見られる平坦面も存在する。				
出土遺物	鉄滓・炉壁片	備考			

400

高殿鉛跡

鉄滓散布

弓谷川

0 10m

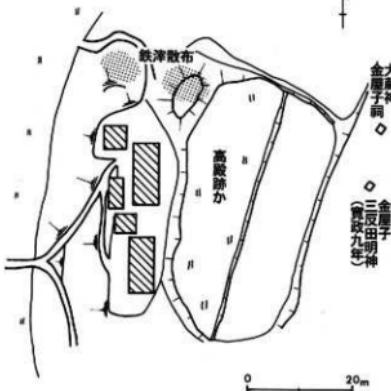
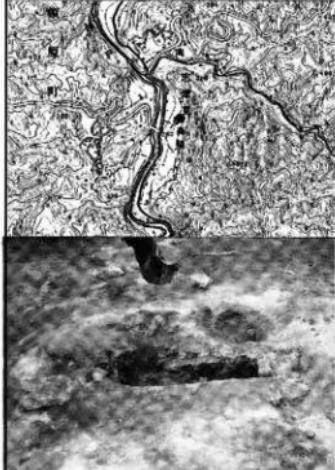
番号	38	遺跡名	門道跡	所在地	島根県飯石郡朝日町大字志津見102-1ほか
立地	丘陵斜面			推定年代	中世（14世紀中頃）
遺構	丘陵斜面を削平した平坦面上に製鉄炉1基と鍛冶炉4基が認められている。製鉄炉は本床状の地下構造のみもつもので、長さ5m・幅1.6m・深さ0.5mである。鍛冶炉4基は1号炉または相互に切り合っていることから、1号炉の廃絶後、相前後して作られたものと見られる。炉の形態などから精錬鍛冶炉の可能性が高いと判断しない。				
出土遺物	鉄滓・炉壁・鍛冶片・陶器器	備考	1993年度、島根県教育委員会発掘調査。「門道跡」「志津見ダム建設予定地内発掘調査報告書」3		

1号炉

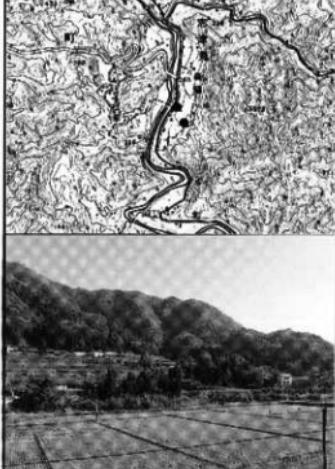
2号炉

0 1m

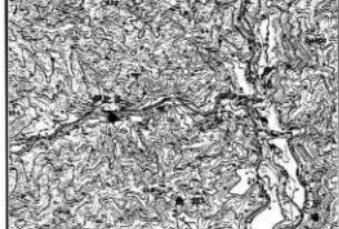
番号	39	遺跡名	神原Ⅱ遺跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字志津見753-1
立地	丘陵斜面平坦面			推定年代	近世
遺構	高殿跡跡と推定される平坦面の周間に多層の鉄滓が散布しており、背後の丘陵には金屋子神御跡が見られる。調査の結果、鉄木体は確認できていないが、鉄滓捨て場が明らかになった。また、その下側の平坦面では大鍛冶跡跡が確認され、炉2基と鉄砧石が確認されている。				
出土遺物	鉄滓・炉壁・金屋子神祠に供えられた「初花」(銅鏡 唐)	備考	1997年度、島根県教育委員会発掘調査。 旧称「森脇金倉跡跡」。		



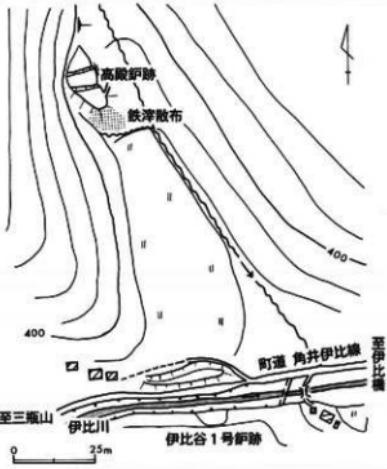
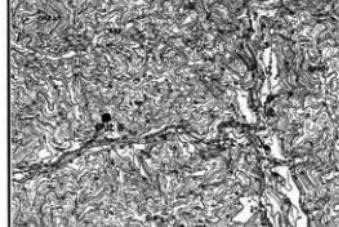
番号	40	遺跡名	神原跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字志津見736-2
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	中世
遺構	小規模な平坦面があり、その下側斜面に鉄滓が散布する。平坦面の裏側から野郭と推定されるが、鉄滓捨て場の大部分は削られているものと見られる。				
出土遺物	鉄滓	備考			



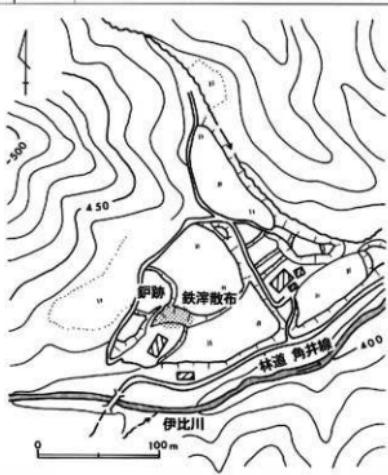
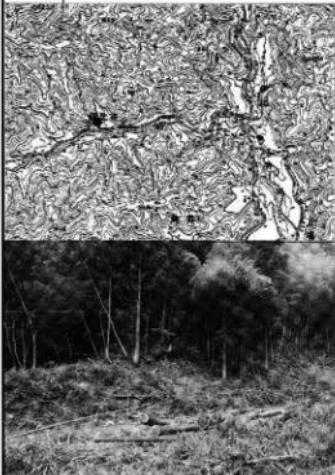
番号	41	遺跡名	伊比谷1号鉄跡	所在地	鳥根県飯石郡頃原町大字角井1827-8
立地	丘陵基部の平坦面	推定年代	近世		
遺構	高殿鉄跡と推定される平坦面があり、その下側斜面に鉄滓が散布している。				
出土遺物	鉄滓（少量であり、既に洗されたものと見られる。）				



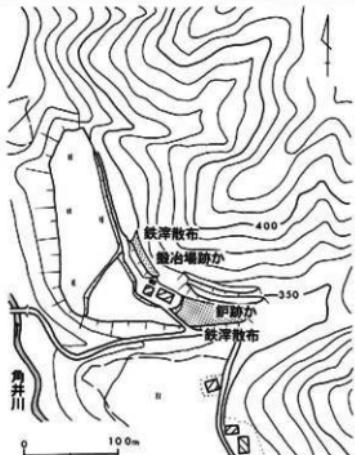
番号	42	遺跡名	伊比谷2号鉄跡	所在地	鳥根県飯石郡頃原町大字角井1854
立地	谷合の丘陵基部平坦面	推定年代	近世		
遺構	階段状に平坦面が3段に造成され、その南側斜面に多量の鉄滓が散布している。				
出土遺物	鉄滓				



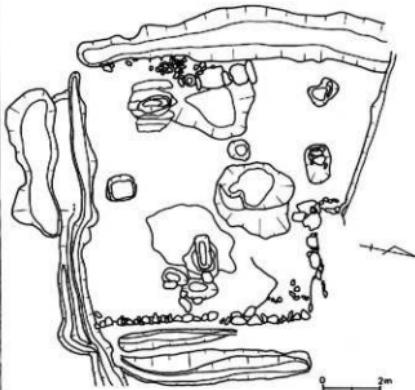
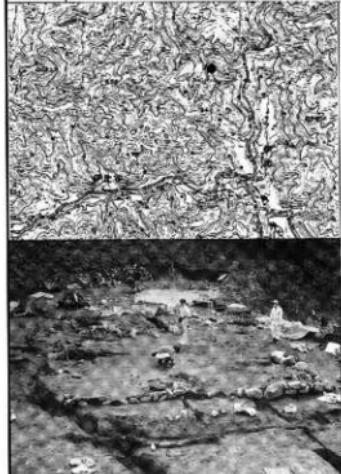
番号	43	遺跡名	伊比谷3号鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字角井1069
立地	丘陵斜面平坦面			推定年代	中世
遺構	伊比谷最南部の斜面に設けられた平坦面の周囲より鉄滓が採取できる。鉄漬窯についての伝承はなく、平坦面の規模から見て、野鉄跡と推定される。				
出土遺物	少量の鉄滓				



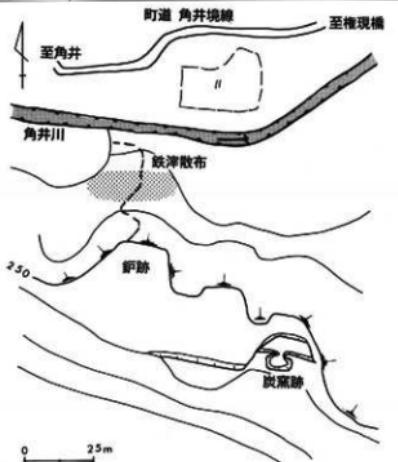
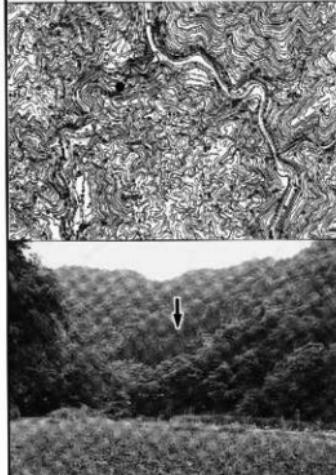
番号	44	遺跡名	向原鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯石町大字角井265, 1303-1
立地	丘陵斜部の平坦面			推定年代	近世
遺構	丘陵斜部に設けられた数箇所の平坦面が見られる。平坦面には製錬岸の散布から製鉄炉が置かれたとみられるものと、鍛冶岸の散布から鍛冶跡と推定されるものがある。				
出土遺物	鉄滓				



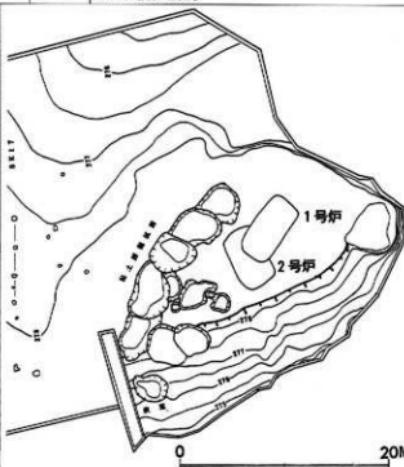
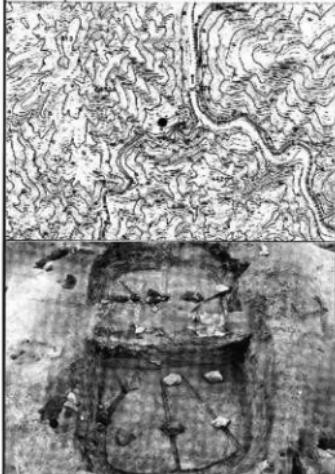
番号	45	遺跡名	獣子谷遺跡	所在地	鳥取県飯石郡頃原町大学角井1284-1
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	近世
遺構	大規模冶場跡が確認されている。昭治伊は12基検出されており、層位的な関係や遺構の配置から3度の作り直し（4時期の複数）が行われたと考えられる。最終段階の大規模冶場跡は、遺存状態が極めて良好で、左下場・本場に相当すると考えられる炉のほか、鉄砧石を置いた部分や炭窯場、竈と思われる遺構も確認されている。				
出土遺物	鉄鉢片・鍛冶炉・羽口・陶磁器	参考	1998年度、鳥取県教育委員会発掘調査。		



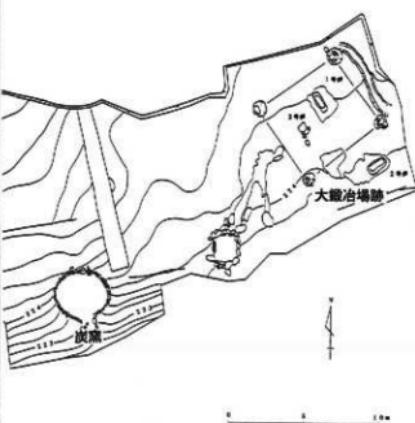
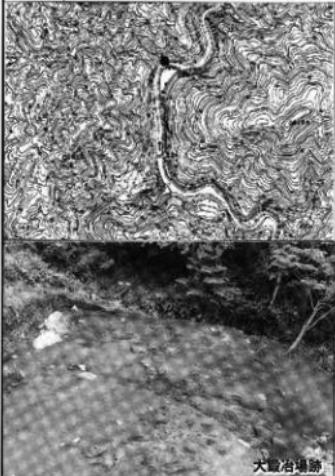
番号	46	遺跡名	施設上斜面	所在地	鳥取県飯石郡頃原町大学角井1220
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	中世か
遺構	丘陵斜面に東西約40mほどの平坦面があり、その先端部から下側斜面にかけて多量の鉄滓が確認できる。立地から見ると野軒と推定される。				
出土遺物	鉄滓	参考			

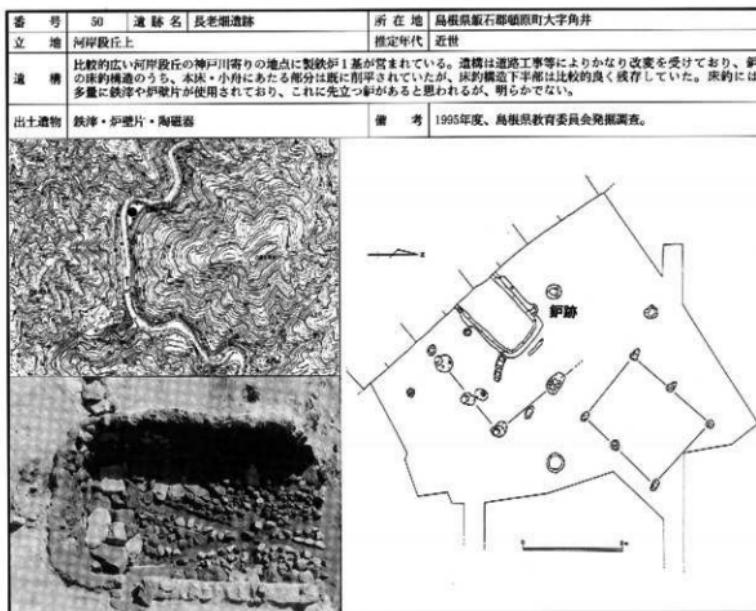
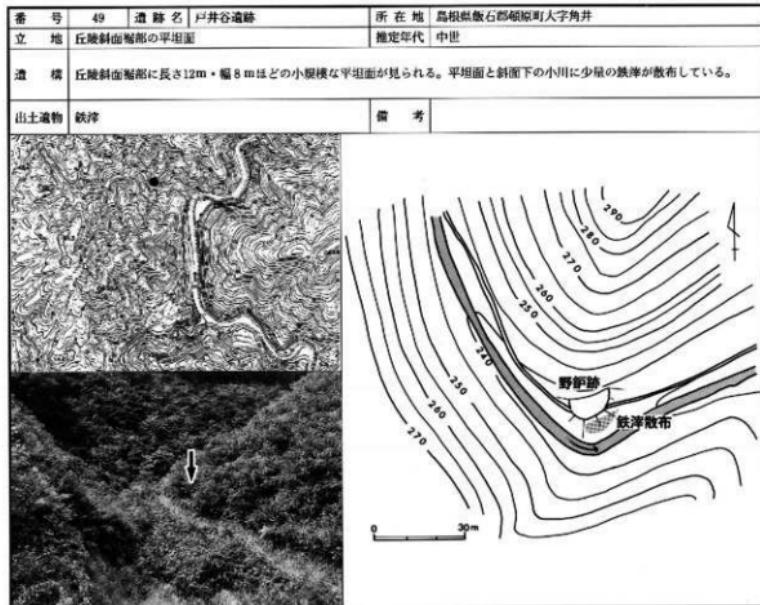


番号	47	遺跡名	下山遺跡	所在地	島根県飯石郡飯原町大字角井1240
立地	丘陵上の平坦面			推定年代	近世後半
遺構	高麗鋳2基の地下構造が検出されている。地下構造の上部まで削平を受けしており、遺存状態はあまり良好ではないが、2号炉へ1号炉の頃に營まれている。このうち、1号炉は本体が失われているが、小舟の基底部以下が検出された。また、2号炉は本床・小舟とも既に失われ、床鉄の下半部のみ遺存している。				
出土遺物	鉄鋳・炉壁片	備考	1996年度、島根県教育委員会発掘調査。通称「カジャ床」という地名が残る。		

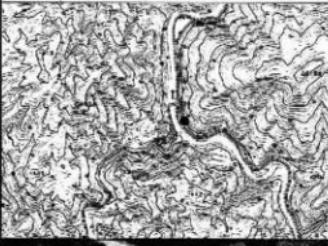


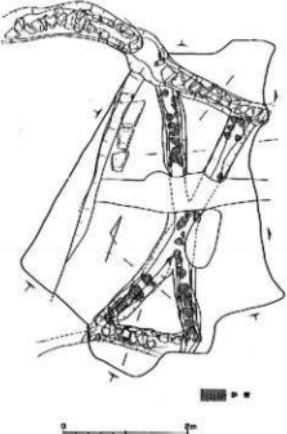
番号	48	遺跡名	戸谷谷尻遺跡	所在地	島根県飯石郡飯原町大字角井1891-3ほか
立地	丘陵斜面の平坦面			推定年代	中世～近世
遺構	平坦面の西側に重複した鋼鐵鋳2基と堅形炉状遺構1基、東側で大體治場跡が検出されている。西側の遺構群は近世以前と見られるものである。鋼鐵鋳は小舟状遺構を備えるものであるが其の遺存状態が悪く、堅形炉状遺構は精錬鍛冶炉と推定される。東側の大體治場跡は近世末のものと見られ、本床・左下場にあたる2基の炉が確認されている。				
出土遺物	鉄鋳・羽口・陶磁器	備考	1996年度、島根県教育委員会発掘調査。西側遺構群の旧称は「戸谷谷尻跡」である。		



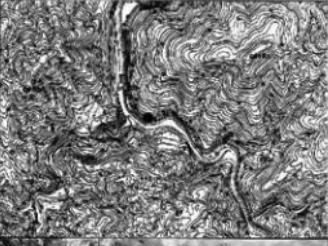


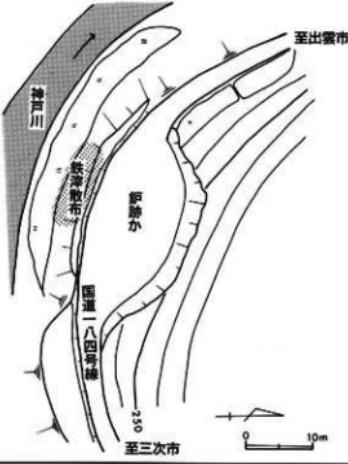
番号	51	遺跡名	殿瀬山毛宅前鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯原町大字角井1273-2
立地	丘陵裾部の平坦面			推定年代	近世
遺構	近年まで宅地として利用されていたため遺構の遺存状況は悪かったが、鉄の床釣構造の最下部が検出されている。伏槽の蓋には炉壁片が使われており、これに先立つ鉄があったことが想定できるが、明らかでない。				
出土遺物	鉄津・炉壁片	備考	1995年度、島根県教育委員会発掘調査。「殿原遺跡・殿瀬山毛宅前鉄跡他」『志津見ダム地内埋蔵文化財発掘調査報告書』4		





番号	52	遺跡名	殿瀬カナクソ畠鉄跡	所在地	島根県飯石郡飯原町大字角井
立地	丘陵裾部平坦面			推定年代	近世か
遺構	県道下の斜面に多量の鉄津が散布していることから、鉄が存在したものと見られるが、土取りのために消滅していた。				
出土遺物	鉄津・炉壁片	備考	1996年度、島根県教育委員会発掘調査。		





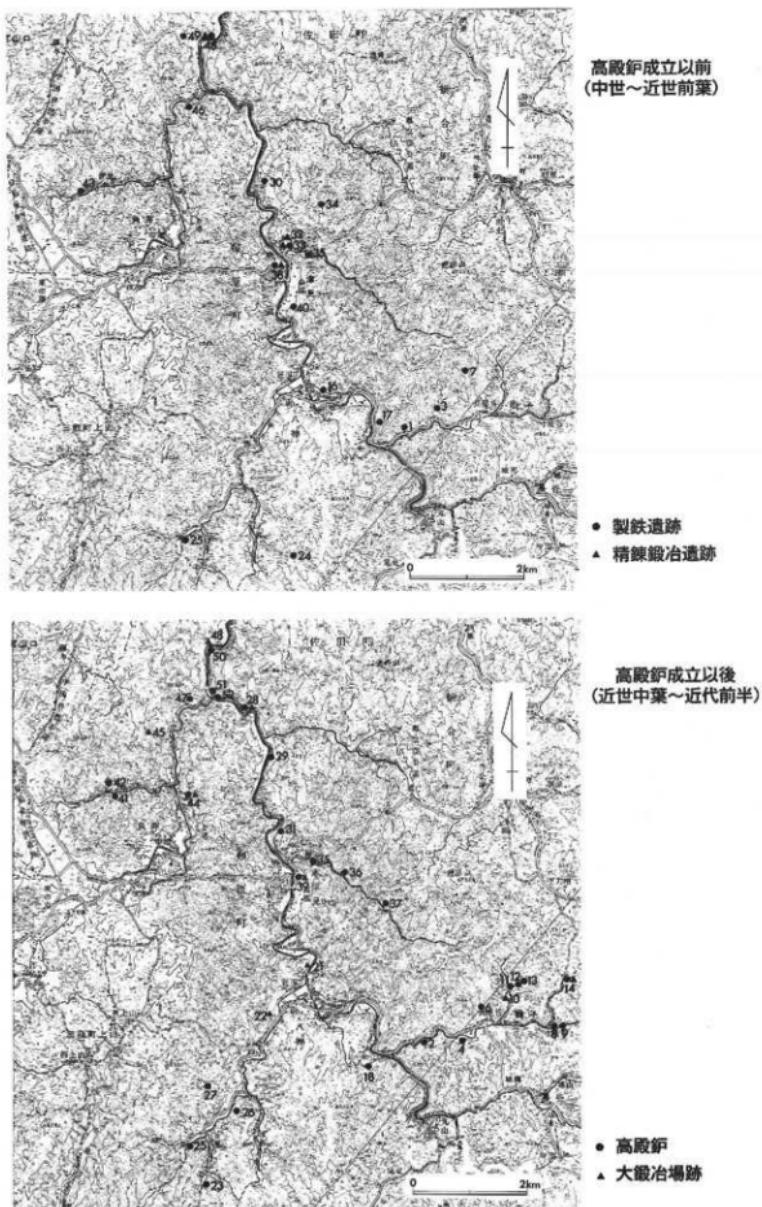


図2 志々地区製鐵関連遺跡時期別分布図

第2部 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

1. 調査の手順

大鍛冶関連遺物については、造構の機能や工程を的確に把握するため、強力磁石（T U J I M A P U P - M）と小型特殊金属探知機による抽出、及び肉眼観察による考古学的な遺物の分類を行った。この中から各造構の機能や工程を代表すると思われる資料を金属学的分析が必要なものとして抽出し、資料観察表と実測図の作成、写真撮影を行った。

資料の抽出、資料観察表の作成は穴沢義功氏に依頼し、併せて分析資料の切断箇所の指示を受けた。また、金属学的調査については㈱九州テクノリサーチに委託し、分析結果については人澤正己氏より玉稿をいただいている。なお、分析結果については、報告作成以前に穴沢氏、大澤氏と発掘担当者で協議している。

2. 遺物観察表の見方

遺物観察表は、新潟県北沢遺跡^①における製鉄関連遺物の検討で採用された様式を基本とし、分析項目などを加えた様式を用いている。主な項目の見方は以下のとおりである。

- (1) 遺物の種類 金属学的調査を行う前に、考古学的な観察によって判定した遺物の種類である。
- (2) 法 量 資料の現存する最大長、最大幅、最大厚、重量を計測したものである。
- (3) 磁着度 鉄滓分類用の「標準磁石」を用いて資料との反応を1から8までの数字で表現したもので、数値が大きいほど磁性が強い。^②
- (4) 造存度 資料が完形品か破片かを記す。
- (5) 破面数 資料が破片の場合、破面がいくつあるかを記す。
- (6) メタル度 小型金属探知機によって判定された金属鉄の残留度を示すもので、基準感度は次のとおりである。
 - H (○) : Hは最高感度でごく小さな金属鉄が残留することを示す。
 - M (◎) : Mは標準感度で一般的な大きさの金属鉄が残留することを示す。
 - L (●) : Lは低感度でやや大きな金属鉄が残留することを示す。
 - 特L (☆) : 特Lは低感度でL以上の大きな金属鉄が残留することを示す。
- (7) 分析の分析をどの部分について行うかを○印で示す。
- (8) 所見 外形や破面・断面の状況、木炭痕や気孔の有無、及び付着物やその他の状況について記す。
- (9) 分析個所 資料のどのような部分をどのような目的で、調査・分析するのかを記す。また、観察表下の実測図網かけ部分は、分析に供した試料の位置を示す。

註

- (1)新潟県豊浦町教育委員会『北沢遺跡群』1992
- (2)小林信一「製鉄遺跡の発掘調査と整理について」『研究連絡誌』第32号 千葉県文化財センター 1991

表1 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

資料番号 1

出土状況	遺跡名 中原遺跡 遺構名 大鍛冶場跡			出土位置 時期：根据 1号炉-II "C年代：1850±60	マクロ 鏡 検 便 度	洋：メタル
	試料記号	検 練：NAK-1 化 学：NAK-1 放 射 率	長 横 幅 厚さ	色 調 表面：黒褐色の津部と茶褐色の 液面や木炭痕が混在		
遺物種類 (名 称)	鍛 治 棘	量	6.1cm 6.1cm 201.8g	粗 破 度 4 破片 前 合 液	メタル度 なし	マクロ 鏡 検 便 度
分析部分 備 考	平面、不整八角形をした木炭痕に囲まれた鍛冶跡である。木炭痕のサイズは1~2cmの間で、平均して1.5cmである。資料下面を除いて、小さな破片が多く、都合、6面で数える。部分的に不定形の流動跡が突出している。下面にも木炭痕は散在するが、一部、灰白色の炉歯土由来の固着土がある。この土には1.3cm以下のスコリア由来と考えられる小石が混在している。津部自体は小さな気孔が散在するやや粗質のもので、木炭痕に接する部分は内側に気孔が目立つ傾向がある。また、木炭痕は厚さ0.1mm前後の薄皮状の鉄酸化物からできている。これは赤熱木炭の表面で直接的に戻炭した鉄が酸化物化しているものであろう。各所に見られる木炭痕の中には、木炭そのものが僅かに遺存しているものがある。ほとんどの木炭痕からは広葉樹か針葉樹か、樹種を特定しにくいが、端部に2ヶ所広葉樹と判断できる部分がある。いずれも菊割れが僅かに生じており、はっきりとした帯管跡が同心円状にめぐっていることから、広葉樹材であることは疑いない。	耐 火 度 カロリー	—	—	X線回折 化 学	○
統 摘 所 見	—	—	—	—	放射化	—
—	—	—	—	—	X線透過	—

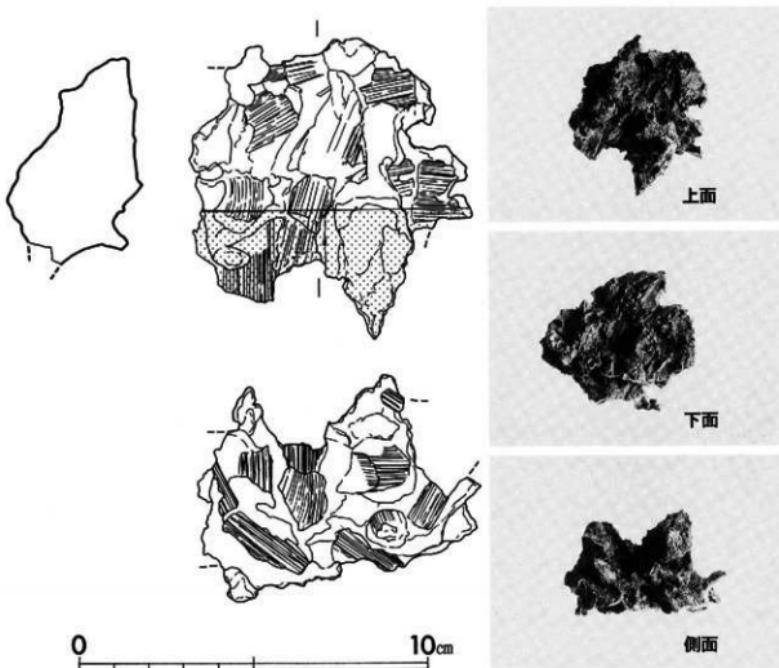


表2 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

資料番号 2

出土状況	遺跡名 中原遺跡 遺構名 大鍛冶場跡		出土位置 時期: 極端	I号炉-II "C年代: 1850±60			マグロ 検 鏡 度	津: 舟土
試料記号	検 級: NAK-2	長径	7.6cm	色 調	地: 暗褐色	表面: 茶褐色~灰褐色	分 析	○
	化 学: NAK-2	法	短径		裏面舟土: 明褐色と灰褐色に遷	元した部分が共存		○
	放射性: -	量	厚さ		磁 着 度	3 メタル度 なし		CMA X線回折 化 学
遺物種類 (名 称)	炉壁 海解物	重量	2.5cm	遺 存 度	破片	前 含 深 -	耐 火 度 カロリー	-
			103.7g	破 面 数	6 断面樹脂	-	放 射 化 X線透過程	-
観察所見	側面 6面が鏡面となり、裏面が剥離面となる炉壁片である。内面は洋化している。炉壁舟土は軟質のボソボソしたもので、多量に粉状が混和されている。粉状のサイズは最大12mmから小さいものは2mmまで、5mm前後のものが比較的目立つ。また、0.8mm大の粒状浮遊物も確認できる。内面は洋化した部分が不均一の厚さで広がっており、左側面は確認できる範囲で2枚に分かれている。右側面の最も厚いある浮遊物の厚さは約9mmである。気孔はまばらで不規則な形で散在する。炉壁内面はやや大きな凹みやコブ状の構造があり、1.5cm大の岸の突出部が部分的に見られる。内面の凹みは2.2cm前後のものが2ヶ所以上あり、1種の木炭痕と考えられる。さらに、こうした凹みの底面には明褐色の炉壁土がしっかり固着している。これは炉壁の補修による上塗土の可能性もある。炉壁全体が灰状に反り返っており、本来のが壁の上下左右方向が反りをもつことが窺える。							
分析部分 備 考	長軸端部2/5を直線状に切断し、炉壁洋部を中心に分析に用いる。残材返却。 炉壁土に多量に木炭粉が混和されているのが特色である。やや粗質なのは意図的な土の選択によるものか、灰等の混和によるものか不明ながら、後者の可能性も考えられる。上下で舟土の色調が異なるのは被熱状態の差によるものであろう。内面の凹みに見られる補修土状の部分は全く溶解していない。							

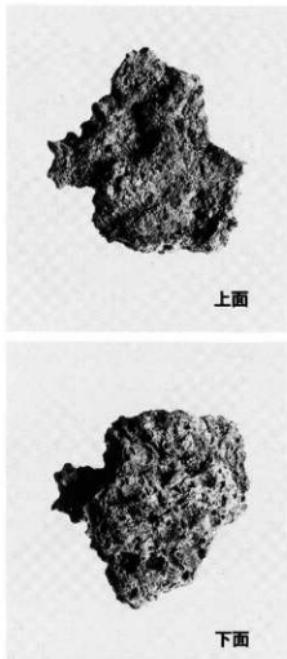
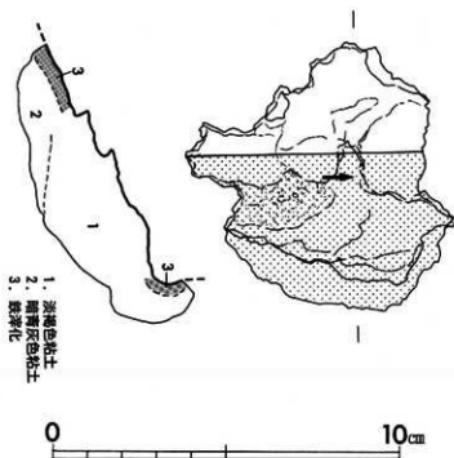


表3 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

資料番号 3

出土状況 試料記号	遺跡名 中原遺跡 遺構名 大鍛冶場跡			出土位置 時期: 根拠 年: 1号炉-I ¹⁴ C年代: 1850±60	分析	溶 : メタル
	検 級: NAK-3 化 学: - 放射化: -	長径 法 直徑 量	地: 色 調 表面:			マクロ 検 鑑 硬 度
遺物種類 (名 称)	粒状体 (8点)	厚さ 重量	磁着度 透光度 破面数	- - -	- 前 合 漫 断面樹脂	C M A X線回折 化 学 耐 火 度 カロリー 放 射 化 X線透過
観察所見	サンプルは、1号炉炉床内 (1区) より回収されたもののうち、磁着弱の大中小球体、磁着強の大中小球体の計8点である。 個別の記録は別表参照。					
分析部分 曲 考	必要品を選択し、粒状体として分析に用いる。残材返却。					

資料番号 3

番 号	直 径 (mm)	色 調	形 状 及 び 表 面	磁 着	気 孔
3-イ-1	4.3	黒褐色	偏平な一面をもつ、ややいびつな球状。光沢はなし。	弱	あ り
3-イ-2	2.2	黒褐色	きれいな球状。僅かに光沢あり。	弱	な し
3-イ-3	1.25	黒褐色	いびつな球状。小さな突起1ヶ所にあり。僅かに光沢あり。	弱	な し
3-イ-4	0.45	黒褐色	きれいな球状。砂粒付着。僅かに光沢あり。	弱	な し
3-ロ-1	5.0	黒褐色	いびつな球状。小さな突起2ヶ所にあり。光沢はなし。	強	あ り
3-ロ-2	2.2	黒褐色	ややいびつな球状。光沢はなし。	強	な し
3-ロ-3	1.25	黒褐色	きれいな球状。小さな突起1ヶ所にあり。光沢あり。	強	な し
3-ロ-4	0.35	黒褐色	きれいな球状。光沢あり。	強	あ り

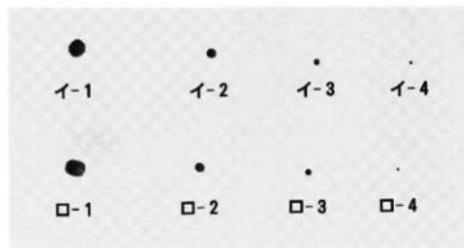


表4 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

資料番号 4

出土状況 試料記号	遺跡名 中原遺跡 遺構名 大鍛冶場跡			出土位置 時期: 根拠 "C年代: 1850±60	I号炉-1			分 析	浮 : メタル	
	検 級: NAK-4 化 学: - 放射化: -	長径 法 量	短径 色 調		地:	表面:	マ ク ロ 検 測 硬 度		C M A X線回折 化 学	
遺物種類 (名称)	鍛造鋤片(8点)	厚さ 重量	磁着度 遺存度	- cm - g	-	メタル度 前 合 残	なし -	耐 火 度 カロリ一 放射 化 X線透過		
観察所見	サンプルは、1号炉床内(I区)より回収されたものうち、磁着の大中小極小、磁着強の大中小極小の計8点である。個別の記録は別表参照。									
分析部分	必要品を選択し、鍛造鋤片として分析に用いる。残村返却。									
備 考										

資料番号 4

番 号	長軸(cm)	短軸(cm)	厚さ(cm)	色 調	表		裏		磁 着	気 孔
					左	右	左	右		
4-イ-1	2.2	1.9	0.016	青灰色	平滑である。やや光沢あり。		やや凹凸あり。光沢なし。		弱	な し
4-イ-2	2.9	2.0	0.012	黒褐色	平滑である。やや光沢あり。		やや凹凸あり。光沢なし。		弱	な し
4-イ-3	2.8	2.4	0.06	青灰色	平滑である。やや光沢あり。		やや凹凸あり。光沢なし。		弱	な し
4-イ-4	2.3	2.2	0.03	黒褐色	平滑である。やや光沢あり。		やや凹凸あり。光沢なし。		弱	な し
4-ロ-1	3.0	1.9	0.24	青灰色	平滑である。光沢あり。		平滑である。光沢あり。		強	な し
4-ロ-2	3.2	1.5	0.18	青灰色	やや凹凸あり。光沢あり。		やや凹凸あり。光沢あり。		強	な し
4-ロ-3	2.6	2.2	0.10	青灰色	平滑である。光沢あり。		平滑である。光沢あり。		強	な し
4-ロ-4	3.0	1.4	0.04	青灰色	平滑である。やや光沢あり。		やや凹凸あり。光沢なし。		強	な し

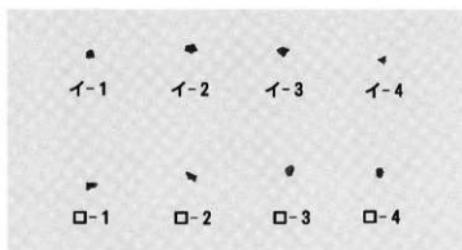


表5 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

資料番号 5

出土状況	遺跡名 中原遺跡 遺構名 大鍛冶場跡	出土 位置 時期: 根柢	土坑 (H-17)	分析			津 : メタル						
				マクロ 検 査 硬 度	CMA X線回折 化 学	耐火度 カロリー							
試料記号 化 学: NAK-5 法 類: 放射化:	検 録: NAK-5 長 時: 26.8cm 短 時: 16.0cm 厚 さ: 8.3cm	色 調: 地: 黒褐色 表面: 暗褐色	磁 磁 度: 4 透 存 度: ほぼ完形 前 合 深	メタル度: なし 断面: 5	CMA X線回折 化 学	耐火度 カロリー	—						
	量: —												
	遺物種類 (名 称): 構 形 鍛 治 津 重 量: 4500.0 g												
観察所見	平面、不整の凹形をした楕円形治津である。肩部に小さな破面が5面確認できるが、全体の外形は生きている。下面に長軸斜め方向の左右から都合、5ヶ所の工具痕が突出部として確認できるのが特色である。上面は1cm以下の粉状が多層に含まれた気孔の多い浮遊で、木炭は光沢のある針葉樹材と明らかな広葉樹材とが混在する。ただし、比率としては針葉樹材が9割方を占める。材の中には枝状の径の小さなものも確認される。岸上面は僅かに凹凸をもつが、全体的には非常に緩やかな皿形である。短軸側面は片側が直立気味で、もう一方は平らな傾斜面である。長軸端部のやや幅広い角は大きく欠けている。この部分のみ深さ1cm程抉れているが、これは一種の気孔であろう。下面に伸びる工具痕に流入した際は、丸棒状の横断面形をもち、先端部に向かい徐々に細くなる形状である。岸側面から斜めに約10cm前後差し込まれた状態で止まっている。工具痕の数は短軸の直立気味の側面に4本、逆面にも1本確認できる。いずれも岸の長軸側面にあり、幅広い方向から側面ないし中央よりに向い、斜めに差し込むような方向を示している。それ以外の底面は不規則な粉状痕に埋め尽くされている。僅かに炉壁土由来と考えられる灰白色の粒子を混入する炉壁粉も図示している。												
分析部分 備 考	長軸端部1/10をL字形に切断し、岸部を分析に用いる。残材基部。 大鍛冶津としてはやや小ぶりの津である。下面の津の突出部から工具の動きが良くわかる資料である。長軸端部側の肩部にあるよう大きな凹みが他の出土資料にもあり、羽口先の岸の凹みを示すものかも知れない。その場合、工具そのものは羽口先方向から差し込んでいくことになる。												

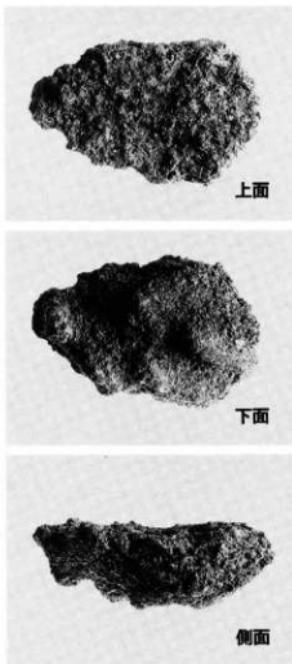
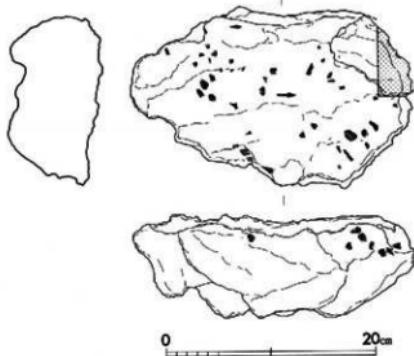


表 6 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

資料番号 6

出土状況	遺跡名 中原遺跡 遺構名 大鍛冶場跡			出土位置 時期：根据	土坑（ハ-16）			マグロ 鏡 鏡 度	洋：胎土		
試料記号	検 級：NAK-6 化 学：NAK-6 放 射 化：	長さ 法 外径	26.4cm 10.0cm	色 調 内径 量	地：淡褐色～灰褐色 表面：灰黒色～黒色	磁 着 度 透 存 度 透 存 度 鏡 面 数	1 8分の7 前 合 深 2以上	メタル度 なし — —	○		
								分析	C M A X線回折 化 学		
									耐 火 度 カロリー		
	遺物種類 (名 称)	羽 口	重量						放射化 X線透視		
観察所見	円筒形のややぶりの羽口である。側面2面は破面、基部側の大半は小破片となったものを石膏で補修している。先端部は本来の密接部が欠け落ち、僅かに被熱している。基部はやや広がり気味に伸びた体部からほぼ直角に成形されている。整形は基部が一向向のヘラケズリ、体部表面も長軸方向へ向かうヘラケズリである。内面の通風孔はほぼ直線状で、棒状の芯棒を回すように抜き取っていることがわかる。胎土は粘質で僅かに紺いスナと砂粒が混和されている。点々と赤褐色の草の根様のものが見えるが、これは採取した原料粘土に入っていたものがそのまま残っているためであろう。外面の被熱は全体に弱く、吸収気味である。側面の片側には密接部と灰白色の酸化部が刻め直線状に残るが、これは装着痕の可能性がある。それ以外の外面に点々とガラス質岸が馴ねたような痕跡と、一部、紫紅色の酸化色が残る。羽口外形は先端から基部にかけて僅かに広がり気味、内面の通風孔は直線状である。										
分析部分	復原に用いられていない小片が3片ほどあるが、これで足りる分析要素であればこれを用いる。不足分は復原部と本体部にかかる短軸端部1/2をL字形に切断して、羽口として分析に用いる。残材返却。										
備 考	側面の被熱痕ないし炉壁痕から見ると、かなり強い装着角度になる。但し、これを標準に使用角度を復原すると、鍛冶としては考えにくい急角度となる。これは鍛冶炉の炉壁が羽口装着部では外側に傾いていたと考えれば理解しやすい。(但し、炉壁角度が不明のために装着角度の厳密な測定は不能) なお、炉壁角度が45°前後傾していたならば、鍛冶羽口としては合理的な使用角度となる。先端部が欠け落ちたままの使用期間には被熱の弱さからごく僅かと考えられ、むしろ、欠け落ちたと判断されたため、炉壁から取り外された可能性もある。羽口本体部は直角方向にひびが入っている部分があり、こうしたひび割れが先端部の脱落の原因となったものであろう。										

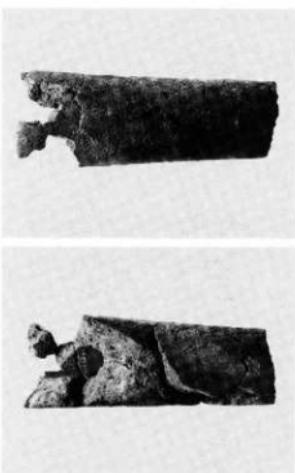
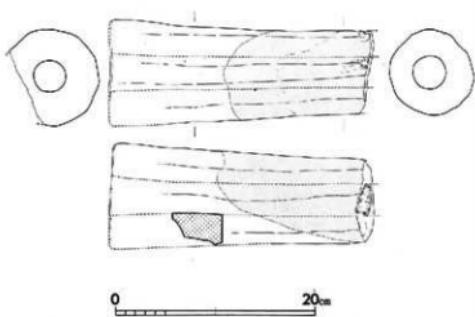


表7 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

出土状況	遺跡名 中原遺跡 遺構名 大鍛冶場跡	出土 位置 時期：根拠	4号炉（ホー15）	序：メタル	
				マクロ 検 査 度	○ ○
試料記号	検 練：NAK-7 化 学：NAK-7	長径 法 短径 量	3.5cm 2.8cm 2.5cm	地：黒褐色 色 調 表面：木炭痕と茶褐色酸化物固着	C M A ○ X線回折化 学 ○
	放射化：—	厚さ	2.5cm	粗 着 度 3 遺 存 度 破片	耐 火 度 カロリー
	遺物種類 (名 称)	重 量	27.0 g	メタル度 なし 前 合 没 —	放 射 化 X線透視 —
観察所見	平面、不規五角形をした小さな鍛冶片である。上面は生きており、側面5面が破面。辺は5mmの大の粉炭を含んでおり、小さな気孔がやや多めに見られる。上面は1cm強の大きさの木炭痕より小さな粉炭痕に加え、気孔が点在する。やや軽量の片である。				
分析部分	全量使用し、岸として分析に用いる。				
備 考	分析資料番号5の上面観と極めて類似している。おそらく楕円鍛冶片の表皮付近の破片であろう。4号炉としては確実な大型の資料がなく、個体は小さいが採用した資料である。				

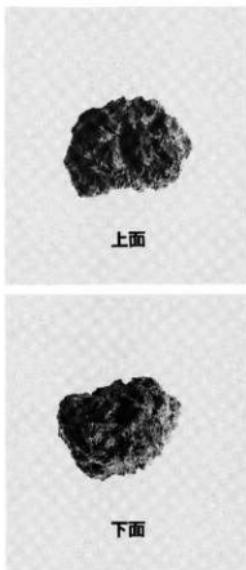
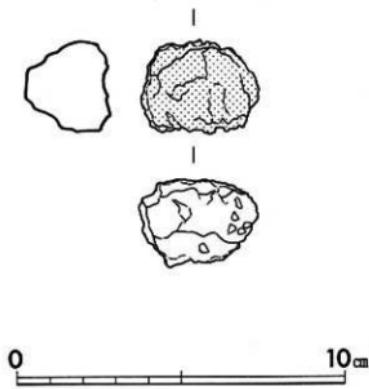


表8 中原遺跡大鍛冶関連遺物観察表

資料番号 8

出土状況	遺跡名 中原遺跡 遺構名 大鍛冶場跡			出土位置 時期：初期	4号炉(へー15)	マクロ 検査 硬度	洋：メタル
	試料記号	検 譲：NAK-8 化 学：— 放 射 化：—	長径 10.8cm 短径 8.2cm 厚さ 5.0cm		色 調 表面：茶褐色	C M A X線回折 化 学	
遺物種類 (名 称)	再 結 合 片 (合 鉄)	重 量 406.5g	透 明 度 破 片 破 面 数 5 6	透 明 度 前 含 濃 —	メタル度 L (●) —	耐 火 度 カロリー 放 射 化 X線透適	
観察所見	平面、不整六角形をしたやや厚手の再結合片である。側面5面と上面1面が破面。資料は片岸が目立つ部分と黄褐色から茶褐色の酸化土砂が目立つ部分に分かれ、中間部には厚さ1mm程度の被膜状の緻密な一次酸化物が広がっている。上面から見て右側の幅広の部分の内側には特殊金属探知機によるL (●)で反応する部分をもち、メタルの遺存を推定できる。再結合の構成要素として5mm前後の片岸や1mm大の粒状体、さらに2mm以下の大きさで、厚さ0.1mm前後の黒色の鍛造剥片や粉炭などが認められるが、主なものは津片である。裏面には石片が点々と固着している。						
分析部分	長軸端部1/3を直線状に切断し、再結合片を中心に分析に用いる。断面樹脂塗布。残材返却。						
備 考	下面に石が固着することや、全体に浅い皿形を呈する点から見て、厚さ5cm程の再結合片層が、浅い凹みに形成されていることがわかる。4号炉に伴なう作業空間の生成物であろう。						

